

始



國語の法則

上の巻

樞密顧問官 一木喜徳郎閣下題字
 文學博士 上田萬年君序
 文學博士 芳賀矢一君序
 文學博士 加藤玄智君序
 文學博士 神宮地直一君序
 文學博士 今泉定介君序
 文學博士 神宮奉齋會長
 神宮奉齋會長 今泉定介君序
 (篤好翁令息) 五十嵐政雄君序
 神廻道雜誌社長 齋藤襄吉著

發行所

神廻道雜誌社

注◎ 意◎

此國語の法則は從來の文法と大に異なる處ある故に従つて從來の文法を學ばれたる人はそれが爲に入りにくき憂あり。又文法を學ばざる人は本書の文法の緻密なる故また入りにくき憂あり。よつて本書を讀むには先づ第一章の靈大體を精讀し第二章以下第七章までをあら〜ひと亘見て下の卷四六の法則にうつり、別紙眞澄鏡の圖を參照して讀みながら天地の理を得らるべし。かく下の卷にて一ト通り造化の理を得て、それより又上卷に立かへり第二章以下につきて言葉の文を味はるれば敷島の道手に取る如く領承するを得べし。

正誤

上の卷九十二ページの終りに

上の卷終りを脱せり

中の卷十七ページの三行目

外なしは外なりの誤

同十八ページ七行目香もは香がの誤

同十九ページ八行目起ては起きての誤

503-71



物名
名弟物之
喜恒影立



序

齋藤氏は斯道に忠實なる人なり先に國語の精神を著
はし今亦此書を編みて余に序を求めて曰く、我國の國
語は實に開闢以來の言葉にして如此きは他國に會つて
なきものなり、然るに現今知名の士すら國語に對して
は門外漢なりと云へる人多し不可解の言と云ふべし。
然れども翻つて思ふに此言必ずしも理なきにあらず則
ち現行はるる文法は只々修辭にのみ必要にして之を
知らざるも日常の行動に不便を感ぜざるものあり。例

せば通ふと云ふ言これをカヨウともカヨフとも又カヨ
オと云ふも文法には正非あれど日常の用語に差支なし
又キヨウ。キヤウ。ケフ。ケヨオの假名遣も文字には
違ひあれど言葉にかけては違はず。是今日の文法を知
らずとも差支なき事となるものゆる茲を以て自然と門
外漢を以て處る人多き所以なり。これ實に此天地開闢
と共に生ぜし我國の言葉に對する道にあらず。是を各
國の例に徴するも彼等は其幾變遷してなれる自國の言
語をも尊重して諸學の基礎となし我國に於ても諸學校
の入學試験に國語を第一に置きけり。されば此例より推

すも門外漢を以て處る人の多きは喜ぶべき事にあらず
本書は我國語が此天地の法則並に人倫の常徑と毫も離
れざる由緒を明にしたるものにて小子朝夕齋戒大約十
年を費やして此書を編みたるものなり。希くは一言の
序を乞ふと、因つて思ふに氏の言麗なりと雖も大に味
ひある言なり。寧ろ其言を書して序に代へむと。則ち
序とす

大正十一年三月十二日

上田萬年

序

齋藤君は温厚篤實、敬神の念が強く「神之道」といふ雑誌を發行して斯道を宣傳しつゝ、多年言靈學を研究せられて居る。今回その多年の研究を集成し、精練して出されたのが即ち本書である。近頃の書物にはよい加減に早出來のものが多くて、精神のこもつたものは少ない。本書の如きは、齋藤君が半生の努力によつて出來たもので、私はよくその内容を理解せず、又言靈學そのものに對しては、多少の異見を有するものである

にかゝはらず、齋藤君のこの精神的産物に向つては、
甚深の敬意を表するのである。

大正十一年三月

芳賀矢一
しるす

序

神隨らの「まこと」は生活の根本にして言葉は全一の
國語として見れば「まこと」の重要な表現である。個
個の言葉を取つて見れば、國語といふ全一の系統中に
屬するものでも、單に思想を發表する方便に過ぎぬも
のが多く、中には未だ全一の系統にすら入ることの出
來ぬ未熟の外國語等も交つて居る。是等種種の言葉は
何れも其の分擔を有つて全一の國語をして其の作用を
充分ならしめて居るが、其の内部に於ては相互の價値

に本末の差が在り、民族と共に其の中に發生し民族の精神夫自身の表現に外ならぬ言葉の如きは一切の言語を統括する中軸である。此の種の民族固有の言葉の研究は民族精神の自覺と離れず爲る場合に始めて其の眞髓を捉へ得、更に其の言葉の永遠なる發達に貢獻するここが出来る。然も日本民族は、殊に理想信仰と言葉との一致、生活と言葉との不二なることに重きを置きて、言葉のさきはふ國と稱して居る。言葉にも精靈の宿り給ふことを信じ、言葉は即ち實行の始にて、言葉自身に産靈あり、創設力あり、言葉の内容は早晩

必ず實現せらるるものと思ひ、猥りに言擧げせざることを根本義として居る。斯様であつて見れば、我國語の研究は特に民族の世界的なる理想信仰に留意しつつ行ふ必要がある。余は國語につきては學識なく齋藤君の著述につき嚴正なる批判をなし得べき資格を具へざる者なれども、齋藤君が我民族精神の熱心なる宣傳者たることを熟知し、又同君が銳意國語を研究し居られしことを承知せるが故に、同君の此の著述には大なる特色の存すべきを思ひ敬意と同情とを捧げんと欲する者である。齋藤君よ、益々健全にして皇國の表現者こ

して彌々斯の學の研究を續け給へ。記して序となす。

紀元二千五百八十二年

大正十一年三月六日

笈 克 彦

し る す

序

余は平素哲學宗教學等の研究に興味を有し近來特に事に神道の宗教學及宗教史的研鑽に従ふものなり。而て各國古代宗教の研究が各國の言語の研究と相待つもの多きは彼のマクスミユラーが言語學の研究と宗教學の研究とを平行せしめて以て彼れが如き多大の貢獻を學界に遺したる跡に徴しても直ちに領會し得可きなり齋藤襄吉君夙に「神廻道」と題する雜誌を月刊し神道の闡明に従事せらるるを知る。今又國語の法則なる一

書を公にせんとして遠くより携へ來りて余の慮を敲き
余に序を囑す、余や刻下公私多忙、未本書の内容を詳
にする餘暇無しと雖も他日小閑を得て本書を閲讀する
に當りては余の專問とせる宗教學上の神道研究にも利
する所ある可きを豫期し、一言の希望を記して君に贈
り以て君の高囑に酬ゆと云爾。

于時大正十一年二月

文學博士 如藤玄智識す

序

我が國體の優秀にして萬邦に比類なき所以は思想言
語歴史文學等各種の方面より歴々として之を立證せら
るべくその何れを採らんにも結果の同一なるべきは固
より當然の理に屬す。而して歴史文學等の方面に至つ
ては世に之が攻究に従事する士に乏しからず、隨つて
その成果の徵すべきもの亦少からずとす。たゞ中にあ
つて所謂言靈學の靈妙なる領域に據り以て國語の精神
を發揮し國體の本領を闡明せんとするもの蓋し齊藤君

を措いて他に幾人かある。言語の學に關する素養の極めて淺薄なる吾人はその内容に亘つて之を云々するの資格を有するものに非ずと雖も此に同君が多年の研鑽にかゝる國語の法則につき日頃の蘊蓄を披瀝して將さに世に問ふ所あらんとせらるゝを聞きその堅固なる精神熱烈なる意氣に感ずるの餘り敢て一言を寄せて序に代ふといふ。

大正十一年紀元佳節

宮地直一

序

人心漸く頽廢し倫理道德も個人主義に變じ哲學宗教も權威を失して唯これ物質萬能肉我實現の世とならんとす、畏友齋藤襄吉氏が此狂瀾怒濤の世に處して「神道」を發行して純神道を鼓吹せられたることは既に世人の知る所なり、今や「國語の法則」を著して從來の國語研究上不完全なる點を痛論して新生面を開展し更に世界中開闢以來の言語を今日に使用し居るは獨り我が國あるのみと斷じ言語學上より國體の精華を説き

「此の大切なる言語の條理を中古に於て湮滅するに至りしは實に大なる失態であつて中古以來の否運皆これに基くのである」と論ぜられたり、抑々地球上國を成すもの多しと雖も開國の祖神が其の國を護り祖神は精神となり國土は肉體と爲り而して民族を播殖し開關以來一絲亂れず連綿として今日に至れる國家は我が國を除きてそれ何處にかある、世界中古國と稱する印度も支那も猶太も希臘も埃及も巴比倫も皆悉く祖神を失つて精神的に亡國して居るか或は民族の興亡常なく肉體的に亡國して居るではないか、然るに獨り我が國のみ

二

此の事あるは開關造化の理に於て卓越せる内容ありしが爲ならむ、此の如く卓越せる我が國家には又卓越せる言語卓越せる風俗の存在すべきこと論を俟たず、これ余が茅者の説を賛しこゝに一言する所以である。

大正十一年二月

今 泉 定 介

序

しきしまのやまとの國は神ながら言舉せぬ國言靈の
祐くる國言靈の幸はふ國と萬葉の歌に詠じられたりさ
れば古へ人は言靈の祐けあるを世の人々も知りつゝあ
りしここ疑ひなきなりさはいひ傳へかたりつぎていに
しへ今のかはりなき世の人らかしこくも神のちはひを
うけて千萬の言葉そなはりけるを中昔より外國の言葉
交りていつの世にかおほろかになりもてきたりけるを
文化の比眞澄鏡といふもの世に出しよりさま／＼なる

言靈のさきかたひろまりしを我父篤好翁は此の傳を聞きて是ぞ誠の教ひなりとて明くれ言靈のはたらきを考ひ出されたり茲に言靈のはたらきを悉しくせられて又名言結本末と云書を著し置れたるも末世に公にせざりしに今度齋藤氏が國語の法則と云ふ書に引き出て壹部として公になさむと余に此はしがきひとことをそへてまごいひおこせたるまに／＼うち見るにこそくはしくあげつられたりこれなん眞澄鏡の面あきらけくうつしとゞめたるといふべし世にくもりなき心もてうつし見れば神のまに／＼言靈の幸はふ國語言靈の祐くる國の

誠の人ともなるものぞいとも尊き言靈の祐けになむいとも悉しき國語の法則といひつべしあな尊き言靈ぞあな目出たき國語の法則ぞあなかしこし

大正十一年二月

五十嵐政雄
しるす

左の一篇は五十嵐篤好翁が或人に與へられたる書翰の寫にして近日其令息政雄君が特に小子に寄せられたるものなり。則ち此書翰と並に政雄君の序文とを併せ見る時は今世上に所謂言靈の由來よく明なるべし。乃ち其初は至つて言葉少なき傳なりしものなるを學者各々猥りに種々の解義をなし已が向きに布衍して孰れも言靈といへるなり。されば今云ふ言靈の解説には中々に怪しき言を交へて世人を惑はすものあり、又はその説いと幼稚にして聞くに堪へざるものなどあるは此の故にて、之が爲めに言靈と云へば迷信附會の説と思ふ人もあるに至りしは皆この弊による事なり。即ち本書に此惑を解き言靈とて別に不思議なる次第あるにあらず、孰れの言靈も皆その音の配列によりて生ずる自然の義なるを明にせり。是一に此篇好翁の賜に出るものなり。聞く處によれば翁は晩年十有餘年常に土藏に起居して俗塵を遠ざけ萬卷の書を友として本書上卷の如きをなされたりと。實にや翁の力にて今かく言靈、産靈等言葉の道が科學的に解説さるる事となり、従つて其應用測るべから

ざるものあるに至りし事は深く謝すべきことである。これ茲に此書翰の全文を掲載する所以なり。

但し此書翰のうち各國學者の評論に亘る處は翁の意見にて小子の是非する處にあらず。尙ほ又中に天平の頃は首領の幸か誰もよく知りたる云云とあるは、此當時はそのことは辨へつらむも此本義は失ひたるにて其事は小子が此傳を得し初めの口傳に日向の老人は物部守屋朝臣の後裔のよし傳へられたり。然れども此翁の當時は舊幕時代にて假にも佛敎の旨に叶はざることを口外すること出来ぬ時代なりしゆえ斯くは書翰に認められしなるべし。

(記者しるす、十一、三、十五)

大人華夷を辨へて道あるを華夏とし道なきを夷狄とすとて。から國聖人の言をひきて證とし。かくあれば

我皇國は華夏といはむも猶あかず神明の國とこそいはめとさとし玉へり是は吾國に眞道ありて天地のひらけしより今に至りてたがふ事なく人心のすぐれたる事萬國に並ぶものなきをよく知り辨へ給へるものなり。然るに今世に其名とどろきて國學者と名のる人々はなかくに此眞道をば知らざるにやあらむ我國の

天皇は天地の共かはりまします事なきをいと尊き事とはいへどそのしかある所謂をいはす又教といふは唯古人の跡を見て行ふ事なりとのみ教へてその古人の行ひの善惡我心に辨へ知らるゝ所謂を知るべき道をささず如斯あるは國學を爲といへども未我神道を知らざればなるべし。しかして唯儒佛を讀るをのみ事とするはいと愧しく悲しきわざになむそもも我神道といふは則天地の道といふ事にて天地の法則にしたがふをいふそは我御國風にておのづから道ありといへどもその御教はかくれて知る人なくなり來にけるを享保年間參河國碧海郡大濱神社を作改め給ひし時天井より木皮にゑりたるもの十七枚出たり。其文字よむべからず、神主寫しとりて元の如く藏めおきたり。其寫したるものを野山元盛といふ人又寫しとりて持たりけるを文化十三年日向國の者といひて老翁一人京に來たり、野山氏と出會事ありしに野山氏かの大濱の神社より出たるものを翁に見せられければいとやすくよみときたり、是神代卷をかな書にしたるものなり、文字はいまだ漢字渡らざる以前の目じるしに書たるものか又はことさらに作りたるものか知るべからず。此老翁我國の御教は言

靈といふものありとて野山氏に傳へたり。それを我師中村孝道大人傳へ給へるなり。さて中村大人かゝる尊き御教秘おくべきにあらず、さりとて私に世に弘めむも亦いかゞなりとて出雲國にゆきて國造俊信公にうかゞひ奉り給ひしかば世に普く弘むべしとゆるし給へるによりて京にて弘められたるが始なり。此日向翁の傳へたる所はいと言少きものにてありけれど夫を根として考へて今は大かたくわしくなりたり。此言靈といふは聲を以て教を立給ひしものにて聲に靈ある事をさとし夫によりて天地の産靈の道をさとしたるものなり。萬葉集の長歌に敷島の山跡の國は神ながら言舉不爲國言靈の幸ふ國とかたりつぎいひつかけり。今の世の人もことごとく目前に見たり知りたり（下略）とあり、此歌にいへる言靈則是なり。此外にも言靈の幸ふ又言靈の祐るとよめる歌猶あり此萬葉のうたよめる天平の頃は言靈の幸ひを誰もよく知りたる事此歌にて炳然たり。今世にも言靈の幸ひ祐ることはいしへにかはれる事なければ知らず、其幸ひを得てあれども是は言靈の幸ひ祐けなりといふ事心づかざるなり言舉不爲とは思ふ事をあらはにはぬことなり。此事近來國學盛なりといへどもいふ人なし。わが先師富士谷御杖大人ひとりその端をおこされたり。篤好それによりてくわしく説たるも

の湯津爪櫛と號て著述しおきたり。此言舉せぬをしへは言舉せざれば言靈の幸ひある事にて此二ツは影をかたちのごときものなり古今集の序にくわしくさとしおかれたるにて見れば此序文を説るものに是を見出ていへるも延喜の頃までは漢學盛なりといへども猶神道の御教かくれざりしこと知るべし。然るを漸々に人知らずなりて享保の頃に至りては漢學者いかゞおもひ惑ひけむあなかしこ。自東夷などいひし人もありけるとか。されど時至れば又いにしへに立かへり大人の如く吾國に眞道ある事をさとり給へる人も出來又我國の道の御教も再あらはれ出たるはいともくうれしく悦ばしき事ならずや。しかるに國學者といふものなかゞに我國の御教を知らず、此言靈の御教をばかたはしきゝたるも拙きものと思ひ深くたどり見す此御教聲をもてさすゆえかな遣ひにかはらすをおえぬも一ツにいふなどを能なりとおもひ又はまだごいのはさるること多かるを拙しとおもへるものなり是みな其枝葉にさごまる故也只古人の行跡を見るべしとのみをしへ、その序にはひたすら儒佛を譏るを旨とする故本居家の書を見れば速に心得られかたはし見てもはやく儒佛を論じそしられ學者めくを悦ぶ人情なる也國學者はひがみたるものと漢學者におもはれて過らむ事いどもく口をしきわざになむ。本居翁の時のかの自東夷ささへいへる人も有けるばかり我國の尊き事を人しらす成り來にけるを翁憤り大聲に罵りて驚かされしもの也其才億兆の人に傑たる事いふもさら也是によりて一天下の人眼覺て今は吾國のいとも尊きことをよく知りたるに

鶴翁の撰序につきて罵り居るは狂人に仰たるものなり。唐土と大和は日月の行道も多くはたがはざる國なれば其教も相たすけて能く心得らるゝ事もあるべきをかへすゝも口惜きわざになむ。近來易經を引て神代卷を説たるものあり又神代卷を引て易をときたるものもあり是等も引學者のわざとは見ゆれど猶國學の筋直道を得ざるもの故まだしき事多く寫本どもにてありし寫もとどめず 近世國學者といふもの多かれどおほかた如斯なる中に我國の道とていへるものもあれどいづれもくなくなる事どもなり。野口降正が三欲三道などいへるは論すべきものにもあらず、見るだに堪ざるものなり。橘守部が神典を説る幽顯出沒の説は古事記の序によれるものなれど猶眞の所を見つげたるものならず、しかのみならず神典のうちを童言わらはことかたうこと 語言ことば などとて省きたるは私の甚しきものにていと恐くさへおぼゆ。富士谷御杖大人の神道とは神の生出あはいでませる次序に所謂あることなりとて説れたるは珍らしけれど此大人の力にていへるものにて眞道とは聞えぬものなり。されど其中にはいとめでたき説も亦多かり、此大人の門人福田美楯みたてがいへる幽顯の説は唯高上なるのみにて教となるべきよしなし。元もとよりはは故大人の説ならず、大人うせ給ひし後福田氏の私に作り出られたることとぞおもはるゝ。和泉國和麿わづらといふ人平春海と

論じたるものに眞道は吾國にありとて周易の語をひきてから人もこゝを頼ふ所なりといはれたるはいとおもしろけれど是はたゞ我國の

天皇萬世かはり給ふことなく君臣位定りて動く事なきをいへるにて、さらばとて我國の教とすべき所を説たる事なし。今少しあかの所あることちす。まづ此人々の外、道をいへるものを見ず。我言靈の御教は一聲々に靈あるゆえに神は加美かみの二聲の靈にてとけば是則天地の活用はたらきなること明らかに知らるゝ故神道かみのみちといふは則天地の道なる事よく心得らるゝ事なり。されば神代卷は聲のことにて夫則神の御うへにして何命と稱すニコトは則御言といふ事なり 今目前の天地の活用が神代なる事をさとし給へるいとも尊く妙たへに奇しき御教なり。日向の翁其大意を傳へたるのみにてくはしくは教へざりしかど天地を規則とする據あるによりて考ぬれば動ぬ事ども考へ知らるゝことなりかし。然るを本居家の學徒はわが國には教といふ事もなきが如くいひ就中平田篤胤は其名海内にとゞろきたれど只博識をほこれるのみにて著述の書多しといへどもとるべきもの少し。中にも妖魅考などは僧徒をそしるとてむかしの洋説を證

自序

我國が獨り世界の各國に比して異なる處に三の種別あり。一は萬世一系の天皇を奉戴する事。一は人代以來國の獨立を維持せし事なり。此二ツは既に世人の能く知る處にて。宣傳に文書に我國の誇りとせり。然れども是を今日の現狀に照らせば。學も海外の諸國に受け。資も亦海外に及ばざるものありて。爲めに遺憾の點今に寡からず。故に此二ツを以て直に海外に誇るべからざるものあり。殊に中古以來の狀態は實に混沌たるものありて。帝位の尊きも時に權臣の制肘を受けられし事あり。尙政權の幕府に移りて以來は。源平の徒互に覇を争ひ。力を以て下に臨むこと恰かも海外諸國が力を以て相推移し、浮沈興亡せしに勞鬚たる狀もありて。右の二ツの優絶なる美點も、中古以來は其内容に整はざる義の生せし

を知るべく。是今も外國に及ばざる幾多の點を有するに至りしのである。就ては斯る弊害は明治以前の鎖國時代なれば、國內の事として或は甚だしき禍害を生ぜざるかなれども。方今の如き四邊に交通貿易を行ひ。しかも文明の利害は遠隔の地を比隣と化し。眞に各國相對峙する時代となりては。以上二ツの美點を永遠に鞏固ならしむる爲にも。何故に中古以來に右の如き弊害を來せしかと。よく其原因を求めて之を改め。以て未來永遠に此の我國の本來の面目を全ふすべきである。これ此義は一は至尊の萬世一系は。亦其臣民なる我々日本人の子孫が長く連續して窮まるなきの義にも當り。又國家無窮の獨立は、亦子孫が永く其享福の地を失はざる基なる義にも當る事にて。則ち斯道は、公私ともに其本來の面目を全ふする事なれば。我々日本人たるものは、先づ一致努力して、以上二ツの内容外觀共に備はる。完全無缺の國體となさざるべからず。

就ては何故に我國は中古以來、此の如き弊害を致せしかと云ふに。これ全く道義の根本義を傳ふる言葉の條理を失なひしからであつて。蓋し我國の言葉は、實に開闢以來の言葉にして。此の開闢以來の言葉を今日に至るも、傳へて日常に使用し居るは我日本國のみである。これ實に世界の各國になき所。我國の獨り有する大なる誇りで、則ち三大特徴の一である。抑々言葉は。人にのみ特に自由に備はるものであつて。人は是によりて百千萬億の言葉をなし。之に依りて有無を通じ、智識を交換し、社會を結び、萬物を攝理し。尙教導に、學術に、人の用を偉大ならしむるものである。則ち人は朝起き夜寝るまで、言葉によつて示導し、示導されて、日常百般の用をなすものなれば。言葉は實に人の指導者とも申すべきものである。故に亦上述せる我國の二個の美點を説くにも、亦この言葉によりて初めて説き得るので。其他かみと云ひひとと云ふも、皆これ言葉にて知るを得る

事なれば。言葉の條理を失へば、従つて萬事その意義を失ふに至るは亦知るべきことである。斯く言葉は極めて大切なるものなれば。されば西洋に今行はれある耶蘇教の經典、新約全書の中に。其最も重要な使徒、ヨハネ傳の第一章の初めに「元始に言葉あり。言葉は神なり。言葉は神と偕にありき。これに生命あり。萬づの物これに依りて作らる」云云と傳へ遣せしにても。言葉が如何に神聖なるものなるかを知るべし。然るに此言葉を完全に今に傳へて。例せば神代の須佐之男命の「出雲八重垣」の御和歌が、今も其儘に平易に了解せらるる國は、獨り我國のみであつて。この耶蘇教の如きも、斯く言葉の神聖なるを傳へながら。其言葉の條理の一片も傳へ得ざりしものは、皆其古代の言葉を失ひし故であつて。其他舊國の稱ある埃及、印度、支那、希臘等皆就れも興亡度なく。爲めに推移の甚だしきを致して、例令同一の文字を使用するも、發音は皆違ひて、古代の言語は杳として知

るべからずなつて居るのである。従つて彼英語の如きも、推移甚だしく、今より約三百年以前の語が今に通せぬ有様に見て、我國を除くの外は、世界に古代語のなきを知るべく。以て我國の言葉の尊きを知るべきである。されば亦我國の言葉には彼のヨハネ傳の悉くが備はりて。言葉の神聖なる所以、並に言葉にて萬づの物が作らるる原理たる、宇宙開闢造化の理が、手に取る如く知らるる條理が。尤とも明らかに備はることの當然なるを知るべきである。

然るに此の大切なる言葉の條理を中古に於て湮滅するに至りしは、實に大なる失態であつて。中古以來の否運、皆これに基くのである。即ち之が爲めに言葉は條理なき、名のみものとなりて。獨り開闢造化の理が知るべからずなりしのみならず。尙上述の二ツの美點も、名のみ存して其實を失ひし姿の如くにもなりしのである。故に亦明治の維新も、名は大義名分に

基づくとは云へ。實は黒艦の脅威に基きしので。其王政復古の御偉業は一重に明治天皇の敬神崇祖の御聖斷に出でしのである。茲を以て天皇の御聖慮も下に徹底するに至らざる所ありしは。蓋し明治の聖代も未だ此言葉の條理の明らかならざりし故。従つて大道の普及せざる處ありし爲にて。爾來西洋の文物を輸入すると同時に。其個人思想等も入り來りて、往々國を咀ひ、又は不敬を企つるものなご生じ。尙其教育の布及すると共に、各種の思想紛然と雜生して。今や之に對して、何等一般に徹底すべき指導も出來難くなりて。紛糾雜然、益々憂ふべき現象も生じて居るのである。是凡ての起原を明らかにする、言葉の條理の明らかならざる爲なれば。先づ言葉の條理を正し、道義の根原を明瞭になす事が。時弊を救ふ尤も急要なる知るべきである。

小子幸にして此の言葉の道を學ぶ十有餘年。斯道尤も大切なることを

悟り。一意専心、その間實に幾多の犠牲を拂ひ、幾多の艱難を忍び。思を潜め、心を凝らし、漸やくにして其大義に通づるを得て。先に國語の精神を著はし、其根元の理を公にせり。然れどもこれ素より草創の作、加ふるに單に根元一片の理に過ぎざれば、普通に適せず。故に其當時より、此の國語の法則を著はし。言葉の活用の理を述べて、斯道を明らかにせむと思ひ。爾來二ヶ年意を籠めて此書を成せり。此間幸にして、故五十嵐篤好翁の令息政雄氏が、其父翁の書を示さるるありて、意外に早く稿を終ゆるに至りしは。蓋し一は篤好翁その他先輩諸氏の靈が來つて助くる處ありし故なるべし。則ち本書に於て國語の精神の義が明瞭となり。尙彼の二ツの特異なる、我國の天皇の萬代に亘ります其すめらみことの神聖なる理由。並に國と人と少しも離るべからざる理も明となり、我國古來の獨立が如何に我々人民に貴重なるものなりしか。又くにと云ふ言葉の條理も分明して是にて、上

述二ツの特徴の極美も明らかとなり尙以上を説明する我國の言葉の玄妙なる理も知られて。則ち我國にのみ獨り傳はりし此の三ツの特徴の存することが。如何に古來より云ひ傳へし神國の名に背かざる、理由備はりしを知るべく。同時に道義の犯すべからずして。此今生の善惡の行爲が、必づ明かに未來に現はるるものなる理解の一片も、普ねく辨へらるるに至りたり。されば希くは爾今は普ねく諸君の努力によりて中古以來の積弊を、旭日に氷の解くる如く改められ得て。眞に我國本來の國粹なる、忠孝の精神が凡ての方面に現はれて。内容外觀悉とく充實し。國運發展の基となりて普ねく平和と幸福を、全世界に漲らし、各國の人をして永く享樂の巷に立たせられむ事を、厚く仰望致します。

大正十一年一月

齋藤襄 吉謹識

凡例

一、本書は殊に言葉の條理を述ぶるものなれば假名遣は尤とも注意せざるべからざる事なれど。著者の不敏なる未だ其用意の至らざるものあり。これ従來一に音韻の大體に就てのみ研究し従つて音の韻うたきに注意せし迄なれば。識者宜しく此書の至らざる處を訂正あらたし。

二、次に漢字の池いぎは殊に錯雜せし事あるべし。例へば通ふと云ふを通ずとも通づとも記す類なり。このずとづには異なる意義あるは申す迄なげども通と漢音にて云ふ時は此差別を付し難きものなれば。爲めに斯る漢字のつなぎには意を止めざる事とせり。以上二點は孰れも概要の原理を早く世に公にせむ爲め等閑にせし事なれば看者之を諒せられたし。

三、本書に言靈の義を一々ことごとりと限り断りたるが。右は國語の精神にも述べし如く。如此

限るは神靈の活用を限る事に當りて宜敷からず。本來は何の聲には何々の言靈の義あり
に申すべきものにて。如此にして初めて廣義に解せられ其正鵠を得らるべきものである
併しながら初めよりしか云ふ時は曖昧に聞えて却つて其義を得難き憂あり。依つて一々
なりと云ひて言擧の罪を犯せしは畏こし。看者之を諒せられよ。

四、第八章四六の法則には尙添ゆべき言葉數々あれども。かくては全く長文に亘るを以て
却つて倦怠を招くを恐れ之を省略せり。就ては右は追て發行する中臣祓十二段略解、又
神祇御鎮祭詔謹解及び其他の書に申すこととすべし。

五、本書四六の法則は何分始ての試みゆる。讀者の便宜の爲めに特更に前後し又疎より密
になす等苦辛し尙用文にも注意したる所あり。故に庶幾くは再三御閱讀あらむことを希
望す。

國語の法則上の卷

齋藤襄吉編

第一章 言靈大體

言靈といふは詞の原質に基づく活用の靈を云ふなり。則ち言葉の魂と申
すが如し。言靈大體とはこれを眞澄鏡によりて其活用、其意味の大體を解
けるを云へるなり。それ人は朝夕にいふ言の多けれど。其言は皆名、言、結
の三類に收まり、此三類にて凡ての用をなすものにて、諸言一として此三類
を洩るゝことなし。名とは梅、松、天、地の比ひ。言とは書く、思ふ、行く、戀しき
の比ひ。結とは行て、のて、人に、のに、物は、のは、咲く、のく、の比ひなり。この名
言、結には各々亦三ツの種別あり。名に生名、結名、言名。言に内言、兩言、外言

結に内結中結外結といふこれなり。さて萬事この名言結にて用をなすこととは。例へば「灯名を結ともす言」、「東京名へ結行く言」、「使名に結遣る言」、鶏名が結鳴く言」などにて知るべし。かく名言結びの三つにて萬事の用を足すことは。則ち天地結びて萬物を生る理とひとし。されば此の名言結びて用をなす。其結びの妙用はかぎりなきものにて。實に天地をうごかし目に見えぬ鬼神をも哀と思はせぬるは皆この結びの働きに依るなり。これ此の名言結びの素をなす七十五の音聲には、其一聲々に皆それの靈ありて、自づから其聲にその靈の働らくあるが故なり。此を以て聞く人は哀とも樂しとも又かなしとも思ふにて。これ皆その靈のあるゆゑなり。此七十五聲のことは國語の精神に委曲述べあれば、茲には略すれどもそれには云ひ洩らせるもあり、云ひ足らざるもあれば、尙ほ茲に其一片を申述ぶべし。參照以て深く其理を得らるべし。

眞澄鏡

眞澄鏡といふは言靈をうつし見る鏡なり。そは次に圖して示すが如く七十五の音聲を現はせしものにて、其義は國語の精神に詳らに申せし如く、決して人爲のものにはあらず。そは古來諏訪神社に言靈祓として傳へ來しに見ても、神代よりの示教なるを知るべし。則ち清音四十三、濁音二十、半濁音五、重音七ありて、之を五柱に分ち、五棚に別け、棚毎に三段ありて、其一段一段に五聲あり。合せて七十五聲を記すなり。而して其序列の次第は聲の順位に成りて、右方と下部は低く、左方と上部に移るに従ひ順次高きをなすなり。則ち圖によりて知らるゝ如く、あゝの聲は調子低く、いゝの聲はあゝの聲より高し。又かゝの聲はあゝの聲に比すれば調子高きも、きゝの聲はかゝの聲よりは更に高く、尙いゝの聲よりも遙かに調子の高き所あるにて、圖の趣を得らるべきなり。則ちあゝの段はあゝおうゝいと次第をなし、以上次々に序列をなして

て、この内言、外言の語を全體に通じて用ひ、此圖の内言を自からいふ言、外言を他へ云ふ言と名付けたり。此區別混ひやすきようなれども、いづれも由緒あることなれば、則ち本書を見る時は内言、外言を本書の如く解して學ぶべきなり。

圖解

この圖解の根本義は國語の精神に悉曲したれば是を略し、茲には平易を旨として記すべければ、就ては國語の精神に畧したる所も述べ、又足らざりし所も補ふべければ、尙ほ併せ見て深く其義を得られむことを望む。就てはまづあ、お、う、い、か、こ、く、け、き、等の聲の順位あるを、物の音に比して申さむにへば車の音、又三絃の音にても聲の調子あるものなり。則ち左の如し。

車の音

三絃の音

空車

ガラ

二

トン

輕荷	ゴロ	二ノ中	ツン
能程	グル	三	テン
小重	ケエ	三ノ中	チン
極重	ギイ		

かく響くに見て、車の響きが荷の輕重によりが、こ、く、け、き、ど、がよりぎに至る程重き調子聞え。三絃の音がた、い、つ、て、ち、と、ど、よりちに至る程高き調子の音あるを聞かるべし。則ち之を聲に試みるもあ、の聲の韻は調子低く。い、の聲の韻は調子高し。又あ、は低き極りなるも、き、の聲に高き極りの調子あるにて、以て順位の違はざるを知らるべし。

次に、棚毎に輕中重の三段あり。こは輕きものは上に、重きものは下に位するにて、天地の自然の理なり。故によく之を計りて聲の大體に涉らるべきなり。乃ちよく之を辨ふには、き、ぎ、ち、(牙の音)、て、れ、ね、(舌の音)、ふ、す、ず、(齒の音)

ぼ(唇の音)や、わ(喉の音)の十五聲の差別をよく記憶し。之を以て言ひ
 試みらるべし。此義はたとへばたつてちの五聲にても。其内ての一聲
 のみが音韻とも舌にて、其餘のたいつちの四聲は皆舌の音なれども韻は各
 々違ひて。例せばたの聲は舌の音なれど、韻はたゝにて喉音喉韻のあに
 韻き。とは同じく舌の音なれど、韻はとゝおとなりて喉音唇韻のおに韻
 き。つは同じく舌の音なれど、韻はつゝとなりて喉音齒韻のうに韻き。
 ちは同じく舌の音なれど、韻はちゝとなりて喉音牙韻のいに韻くなり。
 獨りての聲は同じく舌の音にて、其韻はてゝえとなりて喉音舌韻のえに韻
 くなり。則ちたつてちの五聲中、音韻共に舌音舌韻の全きはてのみにて
 他のたいつちの四聲は音と韻を異にするなり。又ぼの一聲を擧げて申さ
 るに。ば(唇の音)は、び(唇の音)の五聲は孰れも唇の音なれど。此五聲中唇音唇韻なる
 は、ぼの一聲のみにて、他の四聲は孰れも音と韻を異にせり。則ちばは、びゝ

あとあ(喉の音)に韻き。ぶ(唇の音)は、ぶゝとう(齒の音)に韻き。べ(唇の音)は、べゝえとえの
 舌韻に韻き。び(唇の音)は、びゝいといの牙韻に韻くなるが。獨りぼは、ほゝおとお
 の唇韻に韻くなり。依てば、ぼ(唇の音)び(唇の音)の五聲中に音韻を全ふするは、ぼの聲
 なるを知らるべし。其他のきぎぢれねふすすぼも、やわあ(舌の音)の十三聲みな此
 の例にて音韻ともに同じ。されば此の十五聲を能く記憶し。是を以て音
 韻の次第を計る時は。輕中重の差別も知られ、並びに五柱初終の次第、調子
 の順序等よく知らるるものなり。これ此圖の成る所以なり。
 さればこの事なほ念の爲め申さむに。先づ齒並よく、聲爽かなる人、靜かに
 言ひ試むれば、いと能くわかることなり。きは息上顎をすりて、牙の尖にか
 すかにふれて出る聲なり、依つて輕し。ぎは息牙の中程にふれて出る聲な
 り、依つて中なり。ぢは息牙の根にふれて出る聲なり、依つて重し。是牙の
 音の三段なり。次にては舌の先いとかろく上腮へつく、息其所にふれて出

る聲なり、依て輕し。れは舌の先てより少しおくまで上腮へつく、息其所にふれて出る聲なり、依て中なり。ねは舌のおくの方上腮へつく、息そこにふれて出る聲なり、依て重し。是舌の音の三段なり。次にふは息向齒の先へかすかにふれて出る聲なり、依て輕し。すは息向齒の先より少し根の方へかゝりて出る聲なり、依て中なり。ずは息向齒の根にふれて出る聲なり、依て重し。これ齒の音の三段なり。次にぼは唇の先濡れ、その界わづかに打合、息其所にふれて出る聲なり、依て輕し。ぼは唇の先より少しおくの方打合、息その所にふれて出る聲なり、依て中なり。もは唇のおくの方打合、息そこにふれて出る聲なり、依て重し。是唇の音の三段なり。次にやは息喉の口の方にふれて出る聲なり、依て輕し。わは息喉の少しおくにふれて出る聲なり、依て中なり。あは息喉のおく底にふれて出る聲なり、依て重し。これ喉の音の三段なり。斯く音韻の整ひし十五聲を以て餘の音を推すとき

は、輕中重三段の正しき旨をよく知るべきなり。

如此音聲に輕中重の定まること皆その音聲の自然の調子に基くものなるをすれば、從つてあに顯はれかに限り極まる七十五聲の序列の次第も皆聲の調子に知らるものなるを知るべし。此の聲の調子の義は國語の精神に其根本義を明らかに述べたれど。尙茲に平易に其由緒を述べ。一は初めて本書を読む人の爲め、及び容易に國語の精神を解するの便に供せむに。蓋し如何なる事にてても其成るは皆勢の然らしむる所なり。此勢ひこれを俗に調子とも云ふ。彼の一より二、二より三と進むも皆この勢ひ則ち調子によることなり。されば聲の出づる亦この調子に依るは勿論の事にて。其あに現はるとは。あは身體に毫も力を入れず只自然のまゝにして。腹より出づる息、喉に觸れて生ずる聲なり。これ初めて顯はるゝ聲にて其時の口は開口のまゝなり。故にこれを喉音喉韻と申すなり。次に其勢ひ

力となつて身體の内に充たむとなす時には唇自然に外面に出づ。此時息喉にふれて出づる聲おなり。故にこれを喉音唇韻と申すなり。次に力充分に身體に籠もれば、齒は自然に上下合す。此時息喉にふれて出る聲うなり。故に之を喉音齒韻と申すなり。扱もの極まれば變ず、則ち充分に身體に力を籠めたる後は、その力外部に出づるなり。此時は齒は上下に分れて舌も押出さるるなり。この時息喉にふれて出づる聲わなり。故にこれを喉音舌韻と申すなり。さて出づれば入る、則ち出でし舌、口の中深く入り、齒も上下固く合す。此時息喉にふれて出づる聲、上腮をすつていゝの牙音となるなり。故に之を喉音牙韻と申すなり。以上喉唇齒舌牙の五韻は國語の精神に之を音樂の宮商角徵羽の五音に比し、委細申述べ置きたれば、就て本義を知らるべく。其樂音等に徴して尙能く辨へらるべし。さてこのあおわいゝ五聲の内、あとおとわの三聲は開音と申して、何等其聲に餘韻の見る

べきなきに。うゝといゝの二聲は其聲に餘韻ありて、之を云ひ試むれば下腹部に亦うゝといゝの餘韻の残るが如きを覺ゆべし。これ音樂に宮商角徵羽の五音の外に半商半徵の二音生じて。以て千萬無量の音樂の音を生ずる動機となる等しく。此のうゝといゝの餘韻が残るにより、茲に七十五聲を生ずる次第をなすなり。この義次々に委曲申すべきが。此の原韻たるあおわいゝの五音の活用は、則ち我古典に示す別天神五柱の神の用に該當り。そのうゝといゝの餘韻の二ツの活用は、同じく古典に示すところの此世界開闢の祖神に該當る神世の一代二代とある國常立神と豊雲野神の御活用の義に該當るのである。此義は國語の精神に委しく、則ちあおわいゝと及びうゝの七音が別天神五柱及び神代二柱の七柱の獨神、隱身の神の御活用となり悉ごとくこの世界造化の理に該當るので。其理その聲毫も違はぬものである。

蓋し此大天地に、大小恒星其數幾十百ありて。従つて幾百千の大世界あるべしやは知らねど。既に大天地の發現ある以上は其活動は是等の大小恒星の上に同一なるべきは明らかなる次第である。されば此の世界の活動があおうわいの五韻を以て説き得べしとすれば、大天地の義も亦其理を以て能く知らるべきである。則ち此義國語の精神に申せし如く七ツの靈たる別天神五代五柱及び神世二代の二柱のあおうわい及びういの七聲にて。悉く此世界の造化の次第が説明せられ。ことの本なる七十五聲の發生の次第順序が明らかに知り得らるるに依つて。大小の事も亦悉く此理に違はざるを知らるべし。この義猶本書に以下次々に申すべきが。要するに如何なる聲も皆この五韻の内に收まり。其五韻があの一聲に初まりて、次第々に七十五聲をなして萬物萬事の理に適應する事みな此自然の大理に出で、毫も人爲なるものあらず。故に如何なる人も其律に支配

され得ざるものにして。寸毫も否定すべからざる義が存するのである。則ちあおうわいと既に喉唇齒舌牙の五韻に動きて。以て別天神五柱の用に應じたれば。次に動くものは、此の五韻の餘韻に生せしういの音であらねばならぬ。これ神世二代の二柱の御活用に應ずるのである。乃ち此のういの二音は其母體なる別天神五柱の活用の如くあおうわいの順序を以て。あおうわいに次で其活用を致すのである。則ちうが先づあおうわいと活用して、わをうわいの五聲をなし。次にいがあおうわいと活用して、やよゆえいの五聲をなし。茲に喉の音三段十五聲をなすのである。斯く喉音喉韻の三段成れば。次に動くべきものは當然おの唇韻であつて。其唇韻はほぼもの三聲である。何となれば、萬物の聲音の内その唇音唇韻に尤とも叶ふものはほぼもの三聲にて。其他は或は音を異にし韻を異にする等多少違ふ處ある故である。則ちおの唇韻はほぼもの三段と成つて顯は

れ。先づもがあ・お・う・わいと動きて、ま・い・む・め・みと成り。次にぼがあ・お・う・わいと動きてば・ぶ・べ・びと成り。次にほがあ・お・う・わいと動きてば・ぶ・べ・びと成りて。茲に唇音三段の十五聲を成すなり。斯く喉韻唇韻既に其聲を全ふすれば次に動くものはうの齒韻であるが。是亦前の唇韻の例の如く天地の聲の尤も齒韻に適するものは、齒音齒韻のふ・す・ずの三聲であつて。他の聲は多少皆音韻を違へて居る。則ちうの齒韻はふ・す・ずの三段となつて顯はれ。す・先づあ・お・う・わいと動きてざ・ぞ・ぜ・じとなり。次にすがあ・おう・わいと動きてさ・そ・せ・しとなり。次にふがあ・お・う・わいと動きては・ほ・へ・ひとなり、茲に齒音三段の十五聲を成すなり。如此齒韻動き終れば次に動くものはわの舌韻である。これ亦前述の如く天地の萬聲中に、その尤も舌音舌韻に合するものはて・れ・ねの三音であつて。他の諸聲は皆幾分か其音韻を異にして居る。則ちわの舌韻はて・れ・ねの三段と顯はれて。先づ

ねがあ・お・う・わいと動きてな・の・ぬ・ねにと成り。次にれがあ・お・う・わいと動きてら・る・れりと成り。次にてがあ・お・う・わいと動きてたとつてちと成り。茲に舌音三段の十五聲を成すなり。如此舌音成るに至れば次に動くものの牙韻である。これ亦前述の如く天地の萬聲中に其尤も牙音牙韻に適合するものはき・ぎ・ちの三聲で、他は幾分みな音韻を違へて居る。故にいの牙韻はき・ぎ・ちの三段と顯はれて。先づちがあ・お・う・わいと動きてで・ぢと成り。次にぎがあ・お・う・わいと動きてが・ぐ・げ・ぎと成り。次にきがあ・お・う・わいと動きてか・く・け・きと成り。茲に牙音の三段をなすなり。則ち此の如くにして喉唇齒舌牙の韻各々其音を全ふして、茲に七十五聲となり。相産靈て以て千變萬化のこととなり。無量の造化をなすのである。以上十五段七十五聲の序列を明かにし、五韻五柱及び輕中重三段の區別あるを辨へて。以て後文に示す各言靈の意義を味ふ時は、そこに實に超然

たる大法則が宇宙に存する大義を知るを得べく。尙これを事物の名言結の詞に徴すれば。造化の理髣髴として眼前に現はるる如くなるを見るべきなり。以て我國語の如何に尊きものなるを知るべく。古來敷島の道と稱せらるる言葉の道が如何に大切なるものなるかを能く悟とるべきである。

然るに今時往々外國語にJ(ジエー)T(テイ)等の音あるを見。及び我國語の内^にた^とつ^てち^の五^聲が他の七十聲の例と、少しく違ふあるやの觀を抱きこのた^とつ^てち^の五^聲は、た^とつ^てち^の十^聲に分るべきものなるべく。さては此の七十五聲の解は正しからず。則はち八十聲とも、又はJ(ジエー)ニヤ一等の發音を加へて百聲とも二百聲ともなるべきものなりと説く人あり。これ實に考へざる説であつて。所謂る皮想の見である。

就ては先づニヤ一、チャ一等の聲より解くべきに。前にお^おう^わい^の五^聲を除く他の七十聲が皆う^とい^の餘韻に基づきて成出でし義を述べたり。されば此故を以て此のう^とい^の韻に歸する聲は。孰れも其母體たるう^とい^の活用を帯びたり。則ちう^の韻に歸する中柱に當るく^ぐづ^つる^ぬふ^すす^ぶぶ^むの十二聲は、又あ^おう^わい^の活用を起して。例せばく^くあ^あく^くく^くえ^えく^くい^いとなり、ふ^ふが^がふ^ふあ^あふ^ふお^おふ^ふえ^えふ^ふい^いと活用する調子を備ふ。又い^いの韻に歸する留柱に當るき^きぢ^ぢち^ちり^りに^にひ^ひし^しじ^じび^びみ^みの十二聲も亦あ^あお^おう^わい^の活用を起して。例せばち^ちが^がち^ちあ^あち^ちお^おち^ちゆ^ゆち^ちえ^えち^ちとなり。に^にが^がにあ^あにお^おに^にう^うに^にえ^えに^にと活用なす調子を備ふるものにて。尙この上に樂器の力を借りて試みれば。其く^くい^いふ^ふい^いち^ちう^うに^にう^うの音も尙あ^あお^おう^わい^のと活用を起して。人聲の企て及ばざる微妙の音を生じ。人をして坐^まる造化の妙なるを偲びて、感嘆の意を致さしむるものなるが。併し是等の音は皆枝葉の聲

にして、此の七十五聲の末葉に過ぎざるものなるは。かゝるふあふお或はにあにお等の聲は、其韻みな別天神五柱のあおうわいの原韻に達せずして例せばふあーわ、ふおーを、ふえーる、ふいーる。又にあーや、にわーよ、にうーゆ、にえーえ、にの如く中柱に生せし聲はわをうゑるゐに、留柱に生せし聲はやよゆえいに韻きて。孰れもあおうわいの韻に通ずる能はざるものは。これ一は造代の理を顯はすものにして。即ち人の聲のみが獨り正音七十五聲にわたりて、以て別天神五柱の靈に通ずる義あるも。他の動物は、すべて、猫のニャー、猿のキヤツ、犬のクワン、の如く。其韻はわ音や音の神代二柱のうい、の二韻にのみ達するに過ぎずして。人の如く別天神の原韻に達し能はざるものは。是れ實に人と他の動物と大に異なる義を示すものにして。人の獨り尊くして。實に神々の末葉として、此世界に於ける王者として、生存するものなることを深く辨ふべきである。就ては尙能く國語の精

神に述べたる造化の原理に省みて。如何に深遠なる大道の整然として存する義なるを知りて。人の偉大なることを自覺し。あたらし人生を空消し又は自暴の境遇に立ち。幸不幸を顧みざる事などが。如何に人生の義に背くものなるを悟り。況して他人を陥いれて自己を利する非人道の如きが。この造化の御神慮に背く大なるものあるを深く辨ふべきである。則ち是等のふあふお、にあにお等の聲の、其のあおうわいの原韻に達する能はざる聲は皆拗音と申すものにして、正音となすべきものにあらず。従つて若し是等の聲より其言靈を考へむとなせば。その原聲を探ねて其義の輕きに依つて定むべきもので。一音としては別の意義なきものである。次にあつお、ちあちおの言は、つとちの拗音なれば上述の理にて特更に解義する必要なきことなれば、剩すところたどとうていともあるべきと、うとていどの音が正音として見るべきや否やの問題であるが。思ふに此

義にはいと深き義理あるべくして、試みに私考を申さば。洋語に於ける此二音は孰れもTの一字母によりて發音せられ。そのTはタにもテにも又トウにもテウにも通すること、後に記するラロルレリにRとLの二字母を用ひ。ハホフヘヒにFとHの二字母を用ゆる義と痛く異なるのみならず却つてツの音を出すにはTにWをそへ、チの音にCにHを添ゆるなど。ツチ等の大切なる音に一の字母を有せざる奇觀をなせり。そも此のつちの二音は尤とも明白なる音にして、例へば一二をワンツと云ふが如く他に混はざる聲なり。然るに此のツの音譜にTとWの二文字を配し、テイの如き混ざれ易き音にTを使用し、又これをタトテにも用ひしものは。蓋し西洋の文字は假の音譜にして、要は混ざれざるを主としたるものにて。音譜そのものには何の意義も何の價值もなきものなるからである。則ちLとRの譜は、Rはルアルルルルルルルルの拗音の譜であつて。FとH

の二譜も。Fはフアファフエフイと韻くふ(H)の拗音に外ならずして。正音と拗音の區別毫もなく。正音とすべきものに字母なく、拗音に字母を置く等。何等秩序のあらざるを能く知るべきである。されば洋語にテイの語がありしとて是を以て直ちに我國語の不足を呼ぶが如きは失當の事であつて。それにはトウテイ等の語が我國に於て如何に使用せられつゝあるかを能く檢して、然る後に其正不正を申すべきである。然るに此のトウテイ等の語は雅言にも俗語にも我國には古來使用されて居らぬ。依りて熟々按ずるに、此のトウテイ等の聲が我國人の口より生ずるものとすれば、そはたか又はての拗音として生ずる聲であつて、則ちタアタオタウテダイか又はテアテオテウテイなるべきが。此の二者を比較すれば其聲がたにあらすして、なることが能く知らるゝ。そは戀すてふなど、にちの音が出づる義あるに見て尙會得せらるる義であるが。併

し喉唇舌の三開音にかゝる拗音の如きを生ずること他の聲に殆んどなし然るに獨りての聲にかゝる異例あるものは後文言霊の處に知らるゝ如くでに出で働らく靈ある故であつて。てにをはなど言葉の活用を記すにての聲を最初に擧ぐるにても。ての聲にかゝる言葉の活用のあるを知るべく。其次第は下の卷結のところにて能く辨まへらるべきである。然ればたよりたどつとつに至ることの順序も亦この言霊の義を以て充分に解くことを得べし(この戀すてふのてふの義をといふの約まりなどと説く人あれどといふにては勢ひなしてふにて勢を含む言葉となるなりての出で働らく聲の靈によることなり)

それたの段は次に説くら段と共に天の棚にありて。らの反り翻へる段の上)にあり。其音義はたは平らかに治まる靈の義であつて。茲を以て民、
樂、田、畑、旗、正、實、等の言葉がみな此のたの靈の聲に産靈れ居る

ことにもなるのである。

次にとは留り止まる靈で、所、留、閉、滯る、間、戸などの言葉を以て其止まる意義を知らるべく。次につは強く續く靈なれば、則はちたどつ順序は、たの平に治まる、正し、樂しみ等の義が。とに留まり止まつつに強く續くべく。此の世界を開闢なと玉ひたる造化の神の御心の。愛情に基するものなる義が。自然に言葉の序列となり。たととウのとうがつと一熟してたとつとなり。次にてと更に一熟して出で働らく聲となり。ちに結びて内に滿つる義となり。力、道、誓、血等の言葉を産靈に至る因となるのである。則ち如此つと熟したる爲め。一方に及ばざるところを生せしを。てを以て補ふこととなるので。是則ち心の欲するものを手を以て之を致すと其意義に少しも異りはないのである。これトウタイ等の音がないので、亦我國人も古來此の言を云はずとて、毫も不自由も差支もな

く延て今に至りしのである。(どに徹る通る通す等通行するの義あり。右はとほるはどにるの翻へる靈の添はりて徹る通るの義となり。又通すはすは中つ棚の中央にして、七十五聲中の中央にて四通八達の義あり。故に通すと他動的の語となるなり。又遠。とうととがうと根の棚のあ段に韻くは、自然に漠としたる義あり。遠くとくか添はりてくの着止まる見据もつくなり。かく言靈を以て言葉を味ふには内言は(大凡の言葉は内言なり外言などのことば下文に知らるべし)其言を中柱に宛て、其音義をさぐり尙ほ他の四柱に通はせて能く其味をしるべきなり。以てトウテイの音のなき所以、即ち一熟してつの音となりしものなること知るべし。

次に外語に於て。ルにLとR、フにFとHの二字母を有する義に就て申さむに。此のRより生ずるルアルアルルエルイ、Fより生ずるフアフロブエ、Fの聲は、これは前述したるにあにおちあちよ、くわくお、すあ、すお等の

拗音と同一視すべきものであるに。何故に西洋語に此音に對してかゝる二重字母を有するかと云ふに、是には一の理由が存するを見るのである。そはルの二重音の内Lの字母は多く自然の發語に用ひ。Rの字母は多く人爲の發語に用ひられて居る。又フの二重音の内Fは多く自然の發語にHは多く人爲の發語に用ひられて居る。是れ蓋し此のはは、は、ふ、へ、ひの五聲の内にはひと云ふ尤とも大切なる靈ありて。これより日、火、人等の言葉が産靈ばれてある。次にら、る、れ、りの五聲は、らに返り翻へる靈ありて此義ら段のら、れ、りを通じて含まれてある。されば我國語に於ては、このら、る、れ、りの言葉は、言葉の初頭にはあることなく、皆言葉の中、又は末にのみあるのである(言靈の部参照)。殊に有、在、現等はあ、の顯はれ出づる靈に、此のら、る、れ、りの返り翻へる靈の産靈の聲がかゝる場合の聲の義は。調子又は勢ひの義と解すべし)添ふて具體化なす義理があるのであれば。

以てら段の五聲に異常の義あるを辨へらるべく。この義が因となつて西洋の語にRとLとの二字母を使用する原因となりしにもあるべし。併しなから言靈の尊きは孰れも皆同一にして、恰かも上あつての下下あつての上の義ある如し。これら段の五聲は天の棚にありて、其自然の位地よりして反り翻へる義をなさるる義なれば。其靈の言葉に顯はるゝは、我國語の如く言葉の中末にあるが本來なるべし。これ其義たる恰かも光線が地下に入りて地を助け、以て萬物を育成なす義に該當るからである。これ我國本來の國語の發音に此のらるるの言葉のなき所以であつて。亦以て如何に我國語の清く正しきかを知るべきである(今云ふ欄間、欄干、恪氣、瑠璃、蘭、論語、櫓、凜然などの語は皆支那等より亘りたる語なり)。然るに西洋にては、上述の如く之をRLの二音に分ち。Rのラロルレリを多く人爲的の發語にLのラロルレリを自然的の現象を示す發語に使用する

如きは。これ或は天上地下の差別を標語したるものとも云ひ得れど。こは畢竟拗音の一を用ゆることなれば。正しき言とは申すべからず。次にふに於けるFHの二字母も亦然り。このはほふへひ五聲の内、殊にひの聲に日、火、人の言葉がありて其尊きこと限りなし。これ亦かく二字母を生せし所以なるべきが。唯其RLの所と異なるは、Fの拗音なるFに重要な語多く。且し人爲的の發語多くあることなり。併し今茲に其曲直を呷々するは冗長に渉るを以て聊さか最後に一言し参照に供することとなすべきが。要するに外人には拗音極めて多き義に徴して。我國體の正しきこと就ては我國が本つ國にして。古來外國に比類なき國語を有し居ることの偶然ならざるを、よく辨まへ知らるべきである。

さて以上にて五聲五韻十五段七十五聲初終の次第を能く會得せられたるべければ、次に各聲の言靈を擧げて、尙右の義を明らかになすこととなすべ

さなるが。右言靈の理は天地開闢の義と併せ知らざれば其要を得べきものならねば。そは別冊國語の精神等に見て其要義を得らるべく。茲には以下述ぶる國語の法則を能く辨ふる便宜の爲め、其要項のみを掲載す。

◎注意。各言靈の下に掲げたる詞は、其言靈の意を知るべく、類推し易すき詞を撰び載せたるなり。其解の一片亦國語の精神にあり

う	動	勤	靈	産、動、海、上、初、植
お	外	起	靈	落、忘、行、大
あ	顯	出	靈	頭、曉、足、葦、天
				明、朝、顯、在、有
				趣、押、起、音、劣

わ	締	寄	靈	若、輪、皮、泡、皺、繩
い	至	止	靈	生、杭、射、疾、石、命
ね	内	集	靈	笑、枝、居直
				繪、撰、柄、歸、養

●をうるか。此の四聲の言靈はア行の本音のおうわいの靈より其意較輕ろし。

や	飛	走	靈	矢、槍、易し、養ふ
よ	寄	集	靈	嫁、淀む、鏡、装ひ
				糸をよる、ごよむ、呼

ゆ 動起靈

結、ゆるむ、弓、湯、ゆらめく、行く、夕暮

●えい。此の二聲はア行わいの本音によるべし。但ア行より調子輕し。

ま 廻圍靈

的、幕、窓、舛、舞、丸、交る、迷ふ、真心

も 下動靈

衣、裳、霜、反、伴、かれも、これも

む 押定靈

浮む、沈む、むすこ、むすめ、積、定む、組

め 起初靈

目、芽、木の芽、天、割れ目、すき目

み 納止靈

御中、神、臣、民、身、實、道、滿

●ばいぶいひ。此五聲はハ行の靈によるべし。但清音より一重嚴し。

●ばいぶいび。此五聲もハ行に依る。但清音より重く濁音より輕し。

●ざぞかせじ。此五聲はナ行の本音に依る。但し清音より一重強し。

さ 廣躁靈

騒、榮る、悟る、醒、笹、勇む、妨、酒

そ 外添靈

衣、袖、裾、外、添、其、圍、背、誹る

す 中集靈

皇、健、住、請
即、汲、雪、すまます

せ 内窳靈

迫る、せく、關、瘦
瀨、防ぐ、汗、芹

し 示染靈

親む、染む、頻、呵
示す、縛る、霜、年

は 開延靈

春、原、濱、橋、腹
走る、晴る、河、働

ほ 上顯靈

炎、穗、帆、頬、譽
外、鉾、毒、火

ふ 進行靈

冬、舟、吹、防ぐ
太し、文、葦、震ふ

へ 退後靈

隔つ、歷、經る、減
謙る、下手、柿のへた

ひ 明通靈

日、火、晝、光、人
響、寛、ひゞ、聖

な 押止靈

夏、生、習ふ、名
菜、情、直し、泣

の 伸延靈

延る、伸る、野、糊
法、登る、軒、飲、咽

ぬ 罷終靈

温、拔、濡る、塗
絶、居ぬ、沼、主

ね 治靜靈

根、眠る、寝る、音
願ふ、嫉む、覘ふ

に 外附靈 荷、似、惡む、膠、脂、紅、羨、谷、饒

ら 返翻靈 原、村、空、櫻、清ら、荒、うら、か、浦、倉

ろ 廣指靈 萬づ、城、室、畔、色、諸々、屯、黒

る 自定靈 やる、とる、ひる、よる、ふる、みる、うる、かる、へる

れ 狹指靈 それ、これ、われ、かれ、くれ、をれ、おのれ

り 盡終靈 なり、けり、ちり、しり、折り、撰り、縁、あり

た 平納靈 正し、豊、寶、田、畑、民、焚、瀧、疊、樂

と 留止靈 留る、所、富、飛、戸、人、閉る、谷、滯る、間

つ 強續靈 強し、常、松、鶴、角、續く、傳へる、勤める

て 出勤靈 出る、手、照る、かへつて、起て、春過ぎて、手柄、行手

ち 内滿靈 満る、力、血、道、士、誓、待、淵、散、因、町

●だごづでち。此の五聲は夕行に依る。但本音よりつよき意あり。

●が、い、げ、ぎ。此の五聲はカ行に依る。但本音よりつよき意あり。

か	光輝靈	神、守、上、光、輝
こ	細抹靈	形、頭、測、香、微、肥、爰、小路、戀、細、粉、子、心、小山
く	着止靈	行く、着、癖、隠、黒、崩づる、酌む、汲、屑、暮
け	消終靈	消す、削る、煙、毛、稻、島、險、陰、嶽、獄
き	限極靈	君、清し、秋、來る、消る、極る、崎、岸、切、聞、嚴

以上七十五聲の言靈を能く味ふ時は。あの顯はれ出づる靈より。きの限り極まる靈に至る。其間の言靈孰れも五韻五柱五棚十五段初終の順序と等しく。整然として列をなし。其聲音の用を人の言葉に顯はして。以て天地の法則を傳へませり。此詳義は孰れ追次申すべきが。能く熟思する時は、造化の全斑を知るを得べく。千古不易の大理法を深く悟るを得べきである。即ち此の法則大理が降つて言葉の根本となり。今に傳へて我國語となりしものにて。用ひて日常の諸用を足らし。演べて萬古の教を示さる。造化の神々の其道を人に致さるる實に深く至れるものなるを知るべきである。就ては此言靈の義によりて我國千萬の國語の意義を辨ふるには。此各言靈の下に記せる詞の如きの意義を推し。漸次其堂奥を知らるべきなるが。其之を知るには、先づ一聲一聲の言靈を辨へ、次ぎに其聲の高低の調子に見て以て其要を得らるべし。例へば笠、瘡、毒、容積この三ツ文

字に記せば一目瞭然なるも。聲にては同じ言葉なり。尤ども是等の分別は其前後の言葉にて能く分るものなれど。尙其言葉の調子に計れば。自づから聞きわけられて、誤つことなきなり。笠は調子高し。瘡毒は中なり。容積は低し。又花、鼻この二ツも。花は高し。鼻は低し。すべて此類なり。斯く聲はその細かなる所までも能く調子にて聞き知らるゝものにて。義を察し情を知るも亦聲によらでは得がたし。例せば、人に物いひかけたるに、其人の答ハエなれば、文字にてもハエなり。されど此ハエの返事に幾様の異なる情あるものなるは。例せば、今日遊びに行かむ供せよといひば、ハエと答ふる聲嬉しげに聞え。今日は彼方へ使に行くべしといひば、ハエと答ふる聲懶げに聞ゆ。則ち腹立も、恐るるも、悲しむも、喜ぶも、疑ふも、驚くも唯一言のハエと云ふ聲の調子にて。其情手に取る如く聞わかるものなれど。されど是を文字にて顯はすことは出来難きものなり。古人俳諧の句

に口あけば五臓の見ゆる山女かなと云へるも此意なり。されば國語の意義を知るにも能く言葉にのせて其義を探らるべく。其緩急輕重高低深淺の意義に求めて味ふときは。大に得らるることあるべきなり。

されば聲は亦いかにもうるはしく恭々しくして。詞もみやびにいふべきことになむ。神代卷岩屋戸の所に曰。日神聞之曰。頃日人雖多請。未有若此言之麗美者也。とあるにても。聲うるはしく。詞みやびなるを賞でさせ玉ふこと知らるべし。拾遺集物名の部したたみ東にてやしなはれたる人の子は、したたみてこそものは云ひけれ。則ち其人の品かたち。心さままでも知らるるものは聲なり。聲の尊とき所以。我國の言葉を尤ども大切になす所以またこれを以て能く知らるべきなり。

名言結の事

さて、聲を結びて詞となす。その詞は、事を辨まへ萬用をなすものなれば

其數の多き幾百萬とも量りなき詞なれども。ひきすべて名。言。結。の三類となるにて。此の三類にて天下の人の用をなして。一ツも滯ふることなし。一例を擧ぐれば

紙を折り

火を燈す

筆で書く

皆この類なり

名は形によりつくことなり。形は地に成る。地は動かざるものゆゑ人より見て形も亦動かす。則ち紙、火、筆(名)の如し。

詞(言)は心の働きによつて生る。心は恰かも天の動きて(人より見て)春夏秋冬風雨霜雪を生じて萬物をなすが如し。紙を折り折れ。火の燈せ燈す。筆の書く書け。の如し。

結とは此の動く詞と動かざる名とを結びて。普ねく天下の人の用をなし。諸々の器什文物を生ずること。恰かも天地結びて萬物の生ずること

異なるなきをいふ。則ち名と詞を結びて萬物の用をなすなり。

故に我國の教は。天地物の三を世の三極と云ひ。君臣民の三を人の三等と申す。蓋し天地は其位定まりありて動かす。物は天地の氣を受けて生れ。榮枯ありて動き用をなし。又君は上に座し、民は下にあり、臣その間を結ぶ。則ち上は下を憐れみ、下は上を敬まふ。臣その間に立ちて上意を下に通し、下望を上を致すなり。此間の法令は之を天地の間にて云へば雷電の事の如し。則ち之に依つて萬物穰り榮え。世上安く治まるなり。故に亦神名に産靈の御名多し。産靈これを結びと讀む。

蓋し道は結びに依つてなる。君臣父子朋友の誼皆然り。假令大道の見るべきなき國なりとも。父慈を施こし(結)子孝を盡し。君仁を施こし(結)臣忠を盡し。朋友互に言を重むじて信義を生ずるなり。

尙ほ古傳に三靈の傳あり。顯靈、隱靈、寢靈、顯靈とは人及び鳥獸等

聲を發し思を述ぶる類。隱靈とは性はあれども聲音も耳目もなく海月海鼠の類。寢靈とは性はあれども非情なる草木の類なり。而して人は此の三つの靈を兼ね備ふ。これ人に尊きものある故なり。されば人たるもの能くこの言葉の道を知り。人たる用を全ふすべきなり。

第二章 名

名に三種あり。生名、結名、言名。

▲生名

生名とは。山川海沼松梅竹鶯の類ひにて。まつ(松)をまことは云はれざる如く。動かざる名を云ふなり。此類のいと多きこと申すまでもなし。

▲結名

結名とは。濁酒白ざけ酒樽酒屋黄金白銀などの比ひなり。このうちに濁りざけしろ酒などいふ時は酒が主なるゆるさけといふ。酒屋酒樽などいふ時は屋樽が主なる故さかといはるるなり。其他しろ金かな貝など又ふね(舟)ふな(舟)などいふは皆同し理りにて。是等を世にかけ相通ず。ねとな相通ずとて通音なりと解くは誤りにて。既に一言一音毎に靈ありて、其意別なることを知れば、一音違へば其義自づと違ふを知るべし。古今集甲斐歌に「甲斐がねをさやにも見しかけけれなくよこをりふせるさやの中山」此歌に心をけけれといへるは甲斐の訛なり。萬葉集常陸歌に「筑波根に雪かもふらるいなをかもかなしきころかにぬほさるかも此歌に布をにぬといへるは常陸の訛りなり。是等訛りなることしるし通音とは云ふべからず。日本紀氣長足姫尊玉島の小河にて魚を釣り給ふ所に曰
舉竿乃獲細鱗魚時。皇后曰希見物也。故時人號其處曰梅豆羅國今

謂松浦訛焉。とあり。則ち通音と云ふことあるものなれば。此めづらまづらといふは通音と云ふべし。然れば此紀に今謂松浦者通音也とあるべきに。訛焉とあるにて通音なるものなきを知るべし。猶書紀にいとみ河をいづみ河、おち國をおと國といへるなど皆訛りとあり。蓋し通音など言ふべからざるは、其通音と解する人も。むかしより言ひなれたることをこそ通音にて聞き分けらるめ、今たとへば坂をさけといはゞ酒ときくべく、鮒をふねといはゞ舟とききて、坂をさけ、鮒をふねと云ふを答むべし。茲を推しても通音といふはなき事なるを知るべし。右結名の例の如き外は皆訛りなりと悟るべし。

▲言名

言名とは。うのひゞきにては詞なるを、いのひゞきにて名となるをいふ。圖して其一端を示せば

詞	中柱	まつる。かざす。はさむ。	うの韻
名	留柱	まつり。かざし。はさみ。	いの韻

此類なり。

言名も通音或は音便といふ人あらむ。こはなき事ながら、結名には音を轉じ、又てにをはの轉じては熟するあり。されどそはいと少なきものにて一様の例としがたし。猶後に云ふべし。

尙言名、結名等の事は。言結の部に違ふる所を参照すべし。

第三章 言

言には。内言、外言、兩言の三種あり。

これを四段活用など稱し、四聲に動くと言きしは非なり。尙下文を見て其意を得らるべきなり。

初柱にて語らむといふ時は、いまだ爲なざるさきにいふ言なり。内柱にて語ると云ふ時は、我心中にて今語らむとして發する言葉なり。(此言多くは心中の思ひのみとなりて言葉に發せざる場合多し。獨語の如きに多き言葉にて、今こそ書こ、今日こそ語ろ、など思ひ決するところなり。故に初柱より現在へ近し)中柱にてかたるといふ時は、今聲を出したる處、かたるの現在なり。外柱にてかたれと云ふ時は、下知(指圖)の詞となるも(命令詞など云ふ)。要するに其事は現在より後の處をさしていふなり。則ちさきに語るべく言ふことのあるか又は行べき先のあるにより、かたれども行けともいふなり。又自からのことには、どばのてにをはへ渡るにて其味ひを知るべし(語れど、行けばの類)。留柱にてかたりと云ふ時は、語り終りしこととなりて去

し言ことばとなるなり。行きし、書きき等にて其趣を知るべし。

從來このかたりなど留柱にていふを體言といひ、かたるなど中柱にていふを用言などいへるあるは大なる誤りなり。即ちかたりなど留柱にて云ふは言名ことばとなるなり(前條の言名の處を見るべし)この言名は名となる故に體言と心得たるものなるべきが。すべて道は現在の中柱を以て主となすものなり。されば言に於てもかたるなど中柱にていふが體にて、これ内言の本體なり。是よりかたれどもかたらむともかたるどもかたりとも働らく也。よくく味ひ知るべし。

又内柱にてかたろなど云ふを俗言なりと云へる説ありて。爲めに五柱の五聲に働らくべき詞を四段活用など云ひ。體面もいと調はぬ文法も生ぜしなるか。これ實に思はざる考であつて。そは蓋し和歌にはかたろといふべき所をかたらむといひて、かたろと内柱にていへることは見えざれば

かたらむといへるは風雅かみびにきこえ。かたろといふは俗言なりとも思ひし爲ならむも。こは前にも申せし如く。未然言も内言も孰れも現在に至らざるところにて。唯少し現在に近し、遠しと云ふけじめあるのみなると。殊に此のかたるの如きは今の今の只今かたり出るさきにいふことなると且つは此言みづからいふ言なるゆへ、自然和歌などによむことの稀れなるあるを以て。和歌になかりしなり。しかし日本後記延暦十五年夏四月丙寅遊宴の御製に

氣左乃阿沙氣奈呼登以非都留保登々擬須、伊萬毛奈可奴加比留能綺、久陪久

此大御製に斯くまさしくよみ玉へるあれば。俗言ならぬを辨ふべく。即ち鳴かむ、鳴こ、鳴く、鳴け、鳴きと働らく内言の一例にて。此御製に鳴ことあるは内柱にて申されたるなり。以て五柱活用の趣を知るべし。

▲外言トコト

外言とは外より來る影響によつて、心に感動を生じて發する詞なり。從來形容詞と稱へまたくしき活用といへるものなるが。此詞はういしきくの五音のみを働らく言なり。左に其一例を擧げて働らく状を示す。

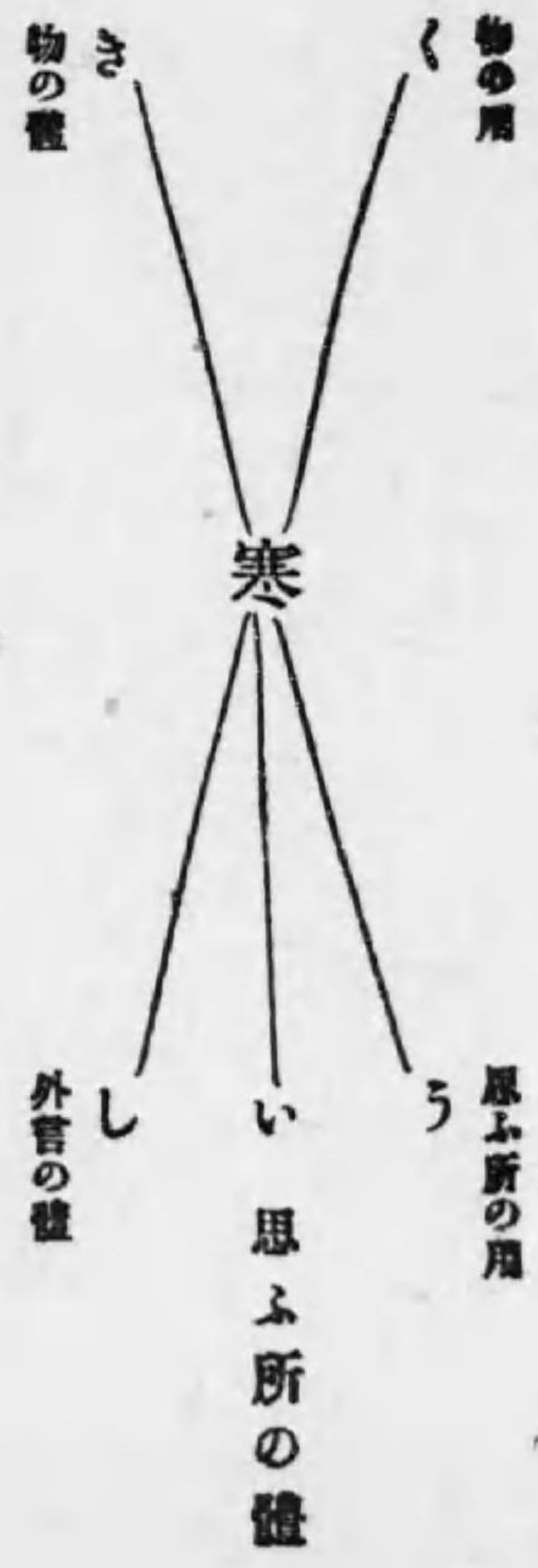
外言の體 し	寒し うまし 遠し し しみ徹るなり。寒しは寒きこそが我身へしみ徹るなり。詞の體にて切る言なり。
物の體のき うまき 遠き	寒き うまき 遠き き 限り極まるなり。寒きとは寒き事に限り極まりたるを云ふなり。故に寒き日、うまき酒など名へつぐなり。
物の用のく うまく 遠く	寒く うまく 遠く く つきこまるとなり。寒くとは寒き事の我方へつきこまるといふ。故に寒くおもふ。寒くてわびしなど言へつぐなり。これ其用をいふにて。現在美味を味ひ居て。其味を語るさきうまくあるなど云ふ言なり。うまきは其體を云ふ言なる故、其物を喰すに居てもいはるなり。故にうまき酒など名へつぐなり。

の思ふ所 體	の思ふ所 用
遠	遠
うまい	うまい
い	う
至りまゝなるなり。寒いとは寒き事の我方へ至りまゝなるなり。今日は寒いこ こジャと心に思ふ所の體なり。	うごきはたらくなり。寒うとは寒うて寒うてならぬこゝにて、寒さの働つきを 心に思ふなり。寒氣身中へ入りてヒヤヒヤと覺るをいふなり。

世に、この寒う、寒いなどういと働らく詞を音便なりといへるもあれど。こ
れ亦誤まれる考にて。このういとのニツは、自から思ふ所の體用にて。ニツ
とも自からの一分にていふ詞にて、我心に思ふ所なり。故に獨言とも云ひ
得べく、表てだゝぬ内證言の比なり。故に女の詞遣ひに多くいへるなり。
文章にたのしう、たのしいなどいへるある是なり。左に八衢の誤を擧げて
外言三段の傳を申さむに。

悪しくして
し
さ
しきまで、
かな、を
に、より
しけれ
ど
ば

右は八衢の解なり。左に三段の傳を承せば
その一



第三章目

その二
さむし—さむき—さむく—さむう—さむい

五五

ち	か	し	し	し	し	し	し	し	し
ち	か	か	き	き	き	き	き	き	き
ち	か	く	く	く	く	く	く	く	く
ち	か	う	う	う	う	う	う	う	う
ち	か	い	い	い	い	い	い	い	い

(外言の體) (物の體) (物の用) (思ふ所の用) (思ふ所の體)

参照。八衢に載する所のあししといふ詞。上のしは働らく音にあらず
たとへばさむしのむに同じ。下のしはさくういと働らくなり。をし
しゆかしの類皆同じ。

その三

高	く	き	し
淋	く	き	し
暑	く	き	し
淺	く	き	し
空	く	き	し

い う く き し
い う く き し
い う く き し
い う く き し
い う く き し

外言體
物 の 體
物 の 體
物 の 體
物 の 體
思ふ所の體
思ふ所の體
思ふ所の體
思ふ所の體
思ふ所の體

是を外言三段の傳と云ふ。

左に参考の爲め外言の詞の二三を擧ぐれば

白し 黒し 甘し 辛し 長し 短し 清し 穢し 強し 弱し
 高し 低し 廣し 狭し 明し 暗し 深し 淺し 早し 遅し
 暑し 寒し 濃し 淡し 嬉し 憎し 樂し 賢し 乏し 頼もし
 耻かし 女女し 雄々し 正し まさし

等、他は推して知るべし。

▲兩言フタヘゴト

●●兩言とは上二段下二段、上一段下一段活用など言へる詞にも當る。則ち内言の各五柱に活用なすと違ひ。兩言は多くは眞澄鏡の中柱と外柱とを運ぶ言下二段にて稀に。中柱と留柱とを運ぶ言上二段ありて。孰れも初柱と内柱にかゝらざるなり。此の外に來の一音が内柱中柱留柱に運び加行變格。爲の一音が中柱外柱留柱に運び佐行變格。見似ミニ、煮射ニヒ、鑄居ヒシ、着干キカの八音が留柱のみにいへると上一段。蹴ケ、綜ヘの二音が外柱のみにいへる下一段言あるが。此一柱のみにいへる音は大抵右の十二言のみにて、他に見當らず。斯く是等の言は、通常一柱二柱乃至三柱を以て五柱の意に通ずる言なれば。自然に自他に通用して、互に其用をなすことなり。故に兩言と申すにて。例へば起きるといふは、我的起きるにも自、他の起きるに他も通用し。其他得受く、懸ふ、用ふ、見居、煮等。みな斯く自他に通用して詞となるなり。

り。左に圖して示せば

柱 留	柱 外	柱 中	柱 内
	にえる きえる くれる	にゆる きゆる くるる	
おちる おきる		おつる おくる	
きる		來 くる	こ
しる	せ	爲 する	
きたる所なり。 過去なり。おちるさ出ふは、すでに地につ	現在と過去との中間なり。にえると云ふは モウにえたる所なり。喰ふ所へ至りたるな り。	現在なり。にゆると云ふは今くらゝに ゆる所なり。未だ喰ふ所へは至らざるなり おつると云ふは未だ地につかざるなり。	

このにゆる、にえる、きゆる、きえる等の中柱と外柱とを運ぶ言は(下二段)數多きものにて。大凡の詞は左の如なり。又これにるれの二音が添はりて活用なすなり。

得	受く	掛く	避く	負く	植う	飢う	枯る	寝る	晴る
垂る	流る	荒る	亂る	濡る	觸る	馴る	捨つ	當つ	出づ
撫づ	馳す	載す	失す	似す	瘦す	着す	醒む	衰む	籠む
箝む	極む	掠む	定む	埋む	求む	留む	嘗む	終ふ	支ふ
替ふ	稱ふ	兼ぬ	撥ぬ	重ぬ	消ゆ	燃ゆ	殖ゆ	生ゆ	萌ゆ
見ゆ	聞ゆ	冴ゆ	榮ゆ	冷ゆ	絶ゆ	費ゆ	吠ゆ	等にて餘は推して	

知らるべし。

次に、おつる、おちる、おくる、おきる等の中柱と留柱とを運ぶ言(上二段)は至つて少なく。大概左の如し。又これにるれの添はりて活用なすあること前

項の如し。

落つ	朽つ	耻づ	閉づ	起く	過ぐ	戀ふ	用ふ	誣ふ	錆ぶ
わぶ	試む	率う	舊る	下る	老ゆ	の如し。			

次に來の如く中柱と留柱にいへるが外に、内柱にていへることのあるはこの一言のみなるべし。次に爲の如く中柱と留柱にて云へる外に、外柱にていへることのあるは此一言のみなるべし。

此外に見る、似る、養る、射る、鑄る、居る、着る、干るの留柱のみにいへる八言、又蹴る、綜るの外柱のみにいへる二言とあれど。これ等は右十言に限ることなるべく。尙これには説あるあれど。暫らく今までの説に従ふなり。尙又この外に良行變格として有。奈行變格として往の説あれど。是は次に載する内言外言兩言の意味に見れば自づから明らかなるものあるべし。要

するに兩言は二柱に運ぶが常體にして其言數も多く。一柱乃至三柱に涉るは常の例に違へる言にて。其數もこゝに出したる外にはをさく見えす。いと少なきものなり。

兩言の外柱留柱へゆくにるを付けていふは俗語なりといふ人あれども。俗語にあらざること。古事記に哭伊佐知流とあるはこれ兩言の留柱なり。こは中柱にていさつると云ふなり。しかし雅言にはおさくつかはざる詞故。歌文章にはつかはざる事と心得べし。

内言、外言、兩言の意味

さて内言は内(自)より生ずる言ゆえ。殊に作爲して示さるゝものなれど。外言は外(他)より來ること故、作爲して示すこと能はざるものなり。たとへば書く、打つなどは皆内言ゆえ、文字を書き又物を打て見せ得ることなれど、暑し、寒しなどは、外より我身に至る感にて。仕形にて見する事能はず。恰

かも鏡にうつる影の如し。向ふより來りて向ふへかへるなり。則ちしくさういの活用は。暑しは外言の體、暑くはつき止める事、暑さの用を云ひ。暑きは限り極まることにて、暑さの體を云ひ。暑うは暑さによりて、此の方へ心の動く事。暑いは暑さの身に至り止まりたるにて、思ふ所の體を云ふなり。則ちくきは向ふの體用、陽言にして表の詞。ういは内の體用、陰言にして裏の言葉なり。以て外言の本來を知るべし。尙ほ例を擧げて、この内外の別を明らかにせむに

悪し
は内言
は外言

しと云ふは、悪む體そとにありて外言なり。是向ふ方に悪しきことなければ言はれず。これしくさういと活用するなり。むと云ふは己れより起ることにて内言なり。善き人にて悪まむと思へば悪まるるものなり。こ

れ悪ま、悪も、悪む、悪め、悪みと活用するなり。これにて内外の言知るべきなり。

次に兩言は。この自他の言に通ふものなり。定む、戀ふ、見る等の言が自他就れにも通ふ義に依つて知るべきなり。

斯く言に三種あるもの故。よく此區別を知らざれば、言を解むこといといと難きものにて、大に八ちまたに迷ふものなり。今此の此の内言外言を混じて解なせるよからの例を一ツあげてさとさむに。かなしむと云ふは内言、かなししと云ふは外言なり。然るに之を混じて、かなしく、かなしみ、かなしめ、かなしま、かなしき、かなしむ、かなししと七ツに働らく詞として解けり(かなししは俗言とし。かなしい、かなしうは音便として省きて)。いとすじなし。是れかなしむは我方よりかなしむ事ゆる内言なり。この内言、他●四柱に働きて、かなしま、かなしも、かなしむ、かなしめ、かなしみと活用なす

なり。次にかなししは悲しきこと他にありて、その他より我をかなしがらする事ゆる外言なり。故にしくきういと活用なすなり。この數いと多し故に能く此の内言の差別を明にせざれば、言を解くに大なる誤を生ずべきなり。

次に。兩言には自然なると働なるとあり。きゆる、さえるなどは自然なりよする、よせるなどは働きなり。又口上をのぶると云ふは働きなり。草木ののぶると云ふは自然なり。これ同じのぶるといふに自然なると働きなるとありて。是亦多く解きまどひたるあり。是はぶの調子にておのづから聞分るものにて。自然ののぶるはのびると留柱へ運び、働きののぶるはのべると外柱へ運ぶなり。これにて明らかなり。

以上この三條をもて別ち見る時は。千萬の詞いとく明らかに知らるるものなるを。此三すちを混じて解きたるものは何程いひても他にはわか

りたるやうにてわかり難く、かきつけてあるさへ、見るあとよりまぎれ易きものなり。さればよく此の三條を明らかにす時は、心やすく誰人にもよく知らるるものなり。

重詞

●重詞は名にもあり。山山川川と云ふが如し。されどこはいと知り易きことなれば略して。茲には言の重詞を示すべし。

内言	兩言	外言	
ゆくく	きゆく	おつく	とほく
ゆきく	きえく	おちく	
			もに

△内言の重詞は、中柱と留柱のみなり。他の柱にてはいはず

△兩言は、中柱外柱留柱いづれも皆いふ。

△外言は體にてくを省きていふ。

言の本末

詞はさまざまに活用たるものなれば。そを解むとする時は。よく其本を尋ね、五柱の意味をもとくべし。たとへば内言より出たる外言あり。兩言あり。これ等は内言が本なれば、内言にて其本の意を知り。さてそれが外言なれば、外言へうつる所の柱の意味をかけて解くべきなり。外言をのみ守り居ては解がたき詞あるなり。猶さまざまに本末あり。次に其一二の例を擧たり。餘は推して知るべし。

結びにも本末あり、同じことらばへなり。

△内言より出る内言

本	末
内言	内言
内柱	初柱
き	き
く	か
た	た
つ	た
おもふ	おもはす
し	しらす
る	しらしめす
現在なり	初柱内柱此二 柱より成る。 中柱より成る。 然なる意味あり

△兩言より内言となる例

本	末
兩言	内言
留柱	初柱
外柱	内柱
中柱	初柱
かける	か
うゑる	う
ひえる	ひ
たれる	た
おきる	おこす
おちる	おとす
のべる	のばる
のびる	のばす

兩言、人為なるは初柱へ出でるに結びて自然と成る。兩言、自然なるは初柱へ出でずに結びて人為となるなり。其中内柱へ出るもあり。さて中柱にてのぶると云詞のべるとはたらくは人為のびると働らくは自然なり。かく正しく其筋わかれたる事見るべし。中柱にていふは同言なれども其調子にてわかるなり。

△兩言より出る兩言の例

本	末
兩言	兩言
中柱	外柱
かく	かけ
たゆる	たえ
おくる	おき
	さす
	外柱留柱よりさすとい びて兩言となる

△内言より兩言となる例

本	末
内言	兩言
中柱	初柱
ゆ	ゆらるる
く	とらるる
と	とらるる
る	遊ばるる
遊	遊ばるる
ぶ	とはるる
問	とはるる
ふ	

初柱よりるると云ひて兩言となる。内柱より成るもあるべし。今覺へず

本	末
内言	兩言
中柱	初柱
ゆ	ゆかする
く	とらする
と	とらする
る	遊ばする
遊	遊ばする
ぶ	とはする
問	とはする
ふ	

初柱よりすると云ひて兩言となる。内柱より成るもあるべし。今覺へず

本	末
内言	兩言
中柱	内柱
焼	やかゆる
く	いはゆる
い	
ふ	きこゆる
聞	おもほゆる
く	
おも	
ふ	
偲	しぬばゆる
ぶ	

初柱内柱この二柱よりゆると云て兩言と成る。

しぬばゆる、しぬばえると云ふ兩言は。しぬぶといふ内言を未然へ廻して、えるといへるにて。われよりしぬばざるに、自然にしぬばるる意味なり。

△外言より出る外言

本	外言
う	ま
く	ほ
そ	く

末	外言	うましき 竹取物語、宇治拾遺	ほろしき 儘馬樂
---	----	----------------	----------

外言の體に一音加はりて外言と成る。此詞例まれなり。茲に出したる外にはをさくおぼへず。

△内言より外言と成る例

末	外言	初柱	ゆかしく	なづかしく	さわがしく	つましく						
本	内言	中柱	ゆ	く	なづ	く	さ	わ	ぐ	つ	ゝ	む

初柱よりしくと云て外言と成る。内柱よりなるもあるべし。
△兩言より外言となる

末	外言	内柱	おそろしく	こほしく		
本	兩言	中柱	おそるる	こふる	こふる	こひる

内柱よりしくと云て外言と成る。初柱より成るもあるべし。
日本紀に、こほしきとよめるは此兩言より出たる外言なり。こひしきといへるは別にひとつの外言なり。

△名より外言となる

末	外言	わらはしき	いさをしき	いましき				
本	名	わ	ら	は	い	さ	を	今

名の下に、しきと云て外言と成る。

萬葉七、今敷は見めやと思ひしみよし野の大川淀をけふ見つるかも

△何にても重ね云ひて外言と成る例

本	末
名	外言
雌	めめしし
雄	ををしし
鬼	をにをしし
花	はなくしし

名を重ねて、下にししと云ひて外言となる。

本	末
内言	外言
中柱	初柱
いむ忌	いまくしし
すきし	
好	

末 外言 留柱

すきくしし

一は初柱にて重ね云て、下にししと云て外言と成る。

一は留柱にて重ねいひて、下にししと云て外言と成る。

本	末
内言	外言
にくむ	にくし
さむ	さわく
さむ	さむ

内言の下の一番を除きて、重ね云ひて下にししをいひて外言と成る。

本	末
外言	兩言
外柱	中柱
かけくし	か
たえくし	た
	ゆる

外言	こひしゝ	わびしゝ	ささびぶしじく
兩言	こひふるる	わびぶるる	ささびぶるる

△兩言より外言となる

本	兩言中柱	うらむる	うらみる
末	外言外柱	うらめしゝ	
本	兩言中柱	くらし	めづらしゝ
末	外言初柱	くらし	

このくるるくらしはくるるの上のるより轉じて外言となり。めづるめづらしは下のるより轉じて外言となる

△けしといひて外言となる

本	外言	きよし	寒し	悲ししし	外言の下の二音を省きてけしといふ
末	外言	きよけし	寒けし	悲ししけし	
二音を加へて外言となる					

露けし。名よりけしと云ふを加へて外言と成るは此の一ツなるか。悲し戀し。此二ツ和歌にはけくとのみありてけしと云ふは見當らねど例によりてけしともいふべきなり。

△結びより外言となる

本	結 つなぎ	さやか	はるか	しづか	かん外柱へ出して、けしと云ひて外言となる。外柱の意にて見るべし。
末	外言	さやけし	のはるけし のどけし	しづけし	

△結びより内言となる

本	結 つなぎ	はなやか	けさやか	そひやか
末	内言	はなやぐ	けさやぐ源氏	そひやぐ源氏

つなぎより獨へうつりて内言となる。

△言名の類 言は本にて、名は末なり

内	中柱	言	まつる	はさむ	かさす	遊ぶ
---	----	---	-----	-----	-----	----

言	留柱	名	まつり	はさみ	かさし	遊び	留柱にて名となる
---	----	---	-----	-----	-----	----	----------

言	名	名	言	名	名	名	
	留柱	外柱	中柱	しぐるる	たむくる	くるる	おつる
		しぐれ	たむけ	くるる	おくる		
		くれ					
	おち 落葉		おつる				
	おき 朝起		おくる				
		外柱にて 名となる					
		留柱にて 名となる					

△言と名とつゞきて名と成るたぐひ

言	外	言	名
	遠	し	とほ里
	寒	し	さむ空
	近	し	山ぢか
	黒	し	墨ぐち

外言の體のしを除き、名に結びて名と成る。或は上、或は下につく。

外言	
名	言
うまし世	うまし
あらし	あらし
を	
外言の體より名につゞきて名となる	

間なしかたま、名なし雉子、亦此類なり。

内言	
名	言
かへり花	かへる
うち綿	うつ
さらす所	さらす
留柱より名へつゞきて名と成る	

内言	
名	言
いむはた	いむ
中柱よりつゞくは一熟したる名と成るなりがたきやうなれどもいむ何と云ふ如きは一熟して名と成るにてもあるべし。	

いむはたと云ふべからず、いみはたといふが正しきなりと云ふ人あり。それは勿論の事にて、内言より名へつゞく時は、留柱よりつゞくべきなり。然れども、それとは違ひて。ちる花、ふる雪など云ふを。ちり花、ふり雪とはをさく、いはざる如く。いみはたと一熟して名と成とは、少しく味ひ違ひて、ちる花などの類ひなるべし。

内言	
名	言
あから橋	あからむ
いみぐし	いむ
ひきいた	ひく
内言の留柱の下の二音を省て名へつゞきて名と成る	

渡瀬、わたせ。向股、むかひもも。とまつかさ、とまりつかさ。是等内言の言名よりつゞくと見れば。次下の生名よりつゞくと同じ格なり。
△名と名とつゞくに聲を省きていふ名

名	鳥 <small>とり</small>
と・と・と た・く・ら ち	
名	弓 <small>ゆみ</small>
ゆ・ゆ・ゆ が・は・ば け	
名	足 <small>あし</small>
	あ・お・と
名	口 <small>くち</small>
	こもりく

口は下にありて省く、此例少なかるべし
 名の下の二音を省きて名へつゞき、一熟して名となる、省く音伊韻なり他もありや考ふべし

文月ふつきふみつき。かたす國かたすみこく。犬君いぬきみいぬきみ。日ひ並知ひなめしひなめしり。是また其例なり。但し下の二ツは下にありて省くなり。
 △名と名とつゞくに、音を轉じてつづく名

名	神 <small>かみ</small>
かむほぎ かむこと	
名	弓 <small>ゆみ</small>
ゆむ手 杖	
名	文 <small>ふみ</small>
ふむ月	
名	公 <small>きみ</small>
きむ達	

名の下の二音を省きて名へつゞき、凡そその聲に隣るか、猶考ふべし

腐狗くさぬこくだいぬ。枯野かぬからぬ。是等は兩言の言名より名へつゞきを一音轉じたる也。

△名と名とつゞくに、てにをはの聲を轉じて一熟する名

名二ツ	水 <small>みづ</small>	門 <small>かど</small>	足 <small>あし</small>	玉 <small>たま</small>	手 <small>て</small>	未 <small>いま</small>	蚊 <small>あぶ</small>	目 <small>め</small>	海 <small>うみ</small>	原 <small>はら</small>	蟹 <small>かに</small>	目 <small>め</small>
一の名	みな口 みなど	あな玉	たな未	かなめ	うな原	かなめ						

如斯名はのを轉じてなと云にかざるか、猶考ふべし。

◎内言兩言を辨へて假名遣の祐とすべし

内言と兩言にて假名遣をわかつなり。左に一例を擧げて其旨をさとさむに。

植うゑ飢うゑともに内言にして又兩言に云ふなり。植うゑるは内言にてはううゑわると云

ふ(今うはると書けども聲にてはうわるとわの聲にいへば。もとわのかなを書しなり。後にかな遣のさだめありてはど書ことになりしなり。則ち植は植わ(る)ば植を植う、植ゑ、植ゐとわをうゑゑかと活用く詞ゆへ。兩言にて植うる、植ゑるとわ行にて書くなり。飢は内言にてはうやすと云ふ故に(う)やさうやすうやすうやせうやし。飢るの兩言はうゆる、うえるとや行の假名にて書くなり。圖して示せば

植	うる	飢	ゆる	座	うる
ゑる		える		ゑる	
					………自然

かく假名遣のことまでも。手ばやく知らるるなり(此の飢は、うえる、うゆると書くなりといへるは。日本紀の和歌に、えぬえひと出たるを、うえのうを省きてえといふなりとおもひて、しか云ふなり。こはうえの約言なるべし)

さて俗言、雅言といふ事、今世人のいへるにしばし従ひて、前に説たりといへども。そのもとは俗言、雅言としてけじめある事にはあらず。俗言はたゞ思ふがまゝにいひ出す言ゆる、優美ならず。いやしげに聞ゆ。されば歌などにこそよまざらめ。常にいひなれて用をなす、其働らき雅言よりもいと多し。故に詞をどくには、俗言をもてさとせば、いと手めじかにわかること多し。故に俗言なればとて、詞を解には用なしとせず。よく心すべきなり。

詞より結びへわたる圖解

詞よりけじめつなぎてにを(結)にわたるに定まれる處あり。この法則、詞に依りて違へれど、内言と兩言は似たる故、一圖にて示す。内言より結びへわたるには、其柱によりて定まれる所ありて、其意味ことごとくわかれたり。兩言も定まれるところあれど兼たるところ多し。内言にては、ゆかむゆかましなど未來を云ふ詞は、初柱よりかゝり、ゆきき、ゆきしなど過去をいふ

詞は留柱よりかゝれど。兩言にては、未來も過去も外柱ひとつにて兼たり
きえむ(未來)きえまし(未來)きえし(過去)きえき(過去)など、いづれも外柱よりか
 くれり。是は聲の調子にて分るなり。繪圖にてよく味ふべし。
 但し結びは尙もれたるも多かるべし。思ひ得るに従ひて書加へこむ。

内言 留言 外言

留柱	シ	爲留柱	外柱	と	見	中柱	みる	内柱	こ	初柱	カ	爲初柱
	シ	爲留柱		と	見		みる		こ		爲初柱	
ゆき	シ	爲留柱	ゆけ	と	起	ゆく	くる	ゆこ	こ	カ	爲初柱	爲初柱
	シ	爲留柱		と	起		くる		こ		爲初柱	
み	シ	爲留柱	み	と	起	み	みる	み	こ	カ	爲初柱	爲初柱
	シ	爲留柱		と	起		みる		こ		爲初柱	

す	シ	爲留柱	な	と	見	な	みる	な	こ	カ	爲初柱	爲初柱
	シ	爲留柱		と	見		みる		こ		爲初柱	
な	シ	爲留柱	な	と	起	な	くる	な	こ	カ	爲初柱	爲初柱
	シ	爲留柱		と	起		くる		こ		爲初柱	
な	シ	爲留柱	な	と	消	な	きゆる	な	こ	カ	爲初柱	爲初柱
	シ	爲留柱		と	消		きゆる		こ		爲初柱	
な	シ	爲留柱	な	と	起	な	おくる	な	こ	カ	爲初柱	爲初柱
	シ	爲留柱		と	起		おくる		こ		爲初柱	
な	シ	爲留柱	な	と	見	な	みる	な	こ	カ	爲初柱	爲初柱
	シ	爲留柱		と	見		みる		こ		爲初柱	

外言

遠	遠	遠
う	い	し
く	き	
言	名	
てはもども	にをはもかぞかなかもまでより	とともやな

この二圖に前に掲げたる重詞のものにわたることゝにて。結びへわたるに就れも定まれる處あるを知るべく。尙前に出したる言の意味をいへるに照らし。合せて結びの味ひを知るべし。左に二三をあげて、内言によりて其味ひをささす。他は推して知るべし。

外	中	内	初	内言
	ゆ	ゆ	ゆ	
	く	こ	か	
	ら	ど	ね	
	む			
ゆきたる	今ゆくに てあるべし と思ふ也	今もはや ゆかむさ するなり	未然に居て 其事を願ふ なり	結
	ら		ば	
	し			
	今ゆくを しるなり		未然より 現在へ至 るなり	び
	め		な	
	り			
	今ゆく事 のはじま りなり		未然より 現在の方へ おしこむ るなり	
			む	
下知也、過去			未然に居て 其事を申し 定るなり	

柱	留	柱	留
ゆき	ね	ゆけらむ	ね
る事を願ふなり	過去にな	にてあるべしと思ふなり	過去にな
し	き	ば	る
ある也	過去になりたる事の極まりしなり	端に至りたるなり	ゆきたる上のこさなり
ぬ	ぬ	よ	ぬ
終りたる也	つひにゆき	に近からむ所をさして下廻するなり	つひにゆき

萬葉卷四月草のうつろひやすくおもへかもわが思ふ人のこともつけ來ぬ。此おもへかもといへる所、おもふかもといへば、今只今如斯おもふかと疑ひおもふ意になるなり。おもへかもといへるにて、よほど前より如斯思ひてあるかと疑ひおもふ意になるなり。ある人、これ等はおもへばかと云ふば、を省きたるなりといへるあれど。ばを省く事はならざるなり。是は外柱の意にて、よく聞ゆることなり。

國語の法則中之卷

齋藤襄吉編

結

第四章 結の三種

結に三種あり。内結、中結、外結と云ふ

内結 言葉のけじめ

内結とは。今世にけじめといふものなり。けは毛にて、ものゝはしの處をいふ。其はしくれの所をしむるゆえけじめといふなり。されば此の内結といふは、てにをはと云ふに似て少しだがへあり。これは詞の下に付て、其詞の全きをなすものなり。即ち結の一種なり。其詞に數々あり

第四章 内結 けじめ

内言、兩言のけじめに

し。ぬ。す。ぬ。な。む。き。づ

外言のけじめに

み。さ

等なり。次々に云ふところ、よく味ふときは明らかに知らるるなり

内結 しの二種の定り

内結しの音には二種の定りあり。過去のしは内言の留柱よりと、兩言の外柱よりかゝり。現在のしは外言の初柱、内柱、中柱よりかゝり、稀にうれししなどしゝと留柱よりかゝりいへるあり、凡例左の如し

	内結かゝる様	
過去のし	ゆきし、思ひし あれし、重ねし	内言留柱より 兩言外柱より

現在のし	はやし、少なし かろし、おもし あつし、さむし	外言初柱より 外言内柱より 外言中柱より
------	-------------------------------	----------------------------

「いづくにか船はてすらむあれの崎、こきたみゆきし棚なし小舟 過去

「おく山の岩本菅を根ふかめて、結びし心わすれかねつも 過去

「朝かげに身はなりぬかきろひのほのかに見えていにし子ゆるるに 過去

「このごろの秋風寒し萩の花、ちらす白露おきにけらしも 現在

右等の和歌によりて、その働らきかゝる様を知るべし(何集にといはざる歌は皆萬葉集の歌なり)

内結 ぬの二種の定り

内結ぬの音には二種のさだまりあり。未然と既然なり。凡例左の如し

		内結かゝる様		
内言	未然	咲かぬ、ちらぬ、放たぬ	内言	初柱より
	已然	咲きぬ、ちりぬ、放ちぬ	内言	留柱より
兩言	未然	枯れぬ、見えぬ、落ちぬ	兩言	調子低し
	已然	枯れぬ、見えぬ、落ちぬ	兩言	調子高し

則ち内言の初柱よりかゝるは未然のぬ、留柱よりかゝるものは既然のぬなり。又兩言よりかゝるものは調子の高低によつて未然と既然を分ち知るべきにて。文字にて萬事の現はし難き、及び詞の活々したることにて知るべきなり

「天地とともをへむと思ひつゝ、つかへまつりし心たがひぬ。内言、既然」
 「心には千重にもも重におもへれど、人目をおほみ妹にあわぬかも。内言、

未然

「大船のはつるとまりのたゆたひに、もの思ひやせぬ。人の子ゆゑに。兩言、
 既然

「水莖の岡のくすわを吹かへし、おもしる兒らが見えぬ。ころかも。兩言、未然
 此歌によりて其はたらきかゝる様を知るべし

右に出せるし、ぬの二種は餘の例に違へたるを示せるものなり。されば猶
 下々に出すを照し見るべし

内言 兩言の内結

内言にて初柱よりかゝるものと。兩言にて外柱よりかゝるものに大要左
 のけじめあり

す

このすといふ音には「隠れ納る所、その事絶てなき」の靈あり

このぬといふ音には「力及ばざる所、その事至らざる」の靈あり

このなといふ音には「おしとどむる所、その事心にとまる」靈あり

このむといふ音には「おし定る所、その事なすに定る」の靈あり

その例

「ゆふかけてまつる三諸の神さびて、いむにはあらず人目おほみこそ

「心には千重にも、重におもへれど、人目をおほみ妹にあはぬかも

此二歌にてずぬの差別を明むべし。たとへば花散らすといふ時は、昨日

咲たる花ゆる今日はちらすといふべし。散らぬといふ時は咲てより七

八日も立て雨風にあひても散らざるを、ちらぬといふべきなり

「秋田ゆるたひのいほりに時雨ふり、我袖ぬれぬほす人なしに

「馬並めていざうちゆかなしぶ谷の、清き磯まによする波見に

「梅の花咲たる園の青柳を、かづらにしつつ遊びくらさな

「居あかして君をばまたむぬば玉の、我黒髪に霜はふるとも

その二

内言にて留柱よりかゝるもの、兩言にて外柱よりかゝるものに。大要左の

けじめあり

し

このしといふ音には「しみ徹りたること、忘るべからざる」の靈あり

き

このきといふ音には「限り極りたること、疑ふべからざる」の靈あり

このつといふ音には「強くつゞきたること、換ふべからざる」の靈あり

このぬといふ音には「やみ終りたること、力及ばざる」の靈あり
その例

「いづれにか船はてすらむあれの崎、こきたみゆきし、棚なし小舟
「をとめらか袖ふる山の水垣の、久しき時ゆおもひきわれは

「大君は神にしませば水鳥の、すだくみぬまを都となしつ
「をどめらが續つら芋かくとふかせの山、時しゆければ都と成りぬ

此二歌大かた同じ趣にてつとぬとのかはりある處を能々心得べし。前の歌は都にはなし難きこと、思ひしを、ツイ都となし給ひしといふにて大君のつよきをいひて、かく都と成りし上は末長く續くべきをいへり。

後の歌は、都とはなるまじくおもひしに、トウドウ都と成りしといひて。

山の方のよわきをいへり。されば山のやみ終りたるにてぬといへるなり

「朝かけに我身はなりぬかきろひの、ほのかに見えていにし子ゆゑに

右の外すをの二音もけじめに似たれども例に違へたる處あり、おさく歌などにつかはざるものなり故に略す

尙左に一例を擧げて右の旨を示すべし

内結	かゝるやう	かゝるやう
す	ゆかす	いです
ぬ	ゆかぬ	いでぬ
な	ゆかな	いでな
	吞す	
	のまぬ	
	のまな	
内	初言	内
言		言
兩		言

ぬ	つ	き	し	む
ゆきぬ	ゆきつ	ゆきき	ゆきし	ゆかむ
のみぬ	のみつ	のみき	のみし	のみむ
柱	留	言	内	柱
いでぬ	いでつ	いでき	いでし	いでむ
		柱		外

たとへば酒のますといへば、生れ得て酒を吞得ざるなり。酒のまぬといふは、常には吞人なれども今日はのまぬといふ事なり。酒のまなといふは、吞で呉れよと押しめて願ふ意なり。酒のまむといふは、酒をのむべしと定るなり。酒のみしと云ふは、其酒吞たる事のいつまでも忘るべからざるなり。酒のみきといふ時は、酒をのみたる事に成りて、また吞まざるかと疑はれぬなり。酒吞つといふ時は、酒をのまぬ事にかへられざるなり。

り。酒のみぬといふは、酒のまぬさきへかへされぬゆる力及ばざる事なり。此のつぬの音に強弱あり。つは強き事にのみいふことながら、弱くとも情につよき事あればいふべし。角力にしていはゞ、我負けた強き對手なりと云ふ情の時は「我負けつ」といふべし。又ぬは弱き事にのみいふことながら、つよくとも情に弱き事あればいふべし。前例にていはゞ、我負けたか、勝つ處に至つて居しに、なさけなやといふ情の時は「我まけぬ」といふべし。右孰れも前に示せし靈の處に照して知るべし。内結の働かくまでにも明らかなるものを。只何となく酒のますといふと、酒のまぬといふとは、其意少し違ひたるやうには誰しも思ひぬれど。そのけじめはかゝる違ひぞと、人に云ふべくもあらず。自らもおほ々々しくして過ぬめり。今かく手にとる如くなりぬ。さればぬの聲に「力およばざる處」

といへる意あるを以て。酒のまぬとあるを俗言に解せば「トウドウのまぬ」と云ふ意となるなり。いかにしひてもまぬなり、モウ力及ばずなり。是に依りて前にいへる内言のぬ、兩言のぬも其味ひを知るべし。則ち咲かぬと云ふは、トウドウ咲かぬなり。咲きぬといふは、トウドウ咲きしなり。花を咲けがし〜と待つに、花の咲がてにせしがトウドウ咲きしなり。ちりぬといふは散らさじとをしみしが、トウドウちりしなり。古今集に

「ちりぬとも香をだにのこせ梅の花、戀しき時の思ひ出にせむ

只ちるともいへるとは意味違へり。をしめどもとまらず終にちりぬとも云ふ事なり。枯れぬ(未然)といふは、トウドウ枯れざるなり。枯れぬ(既然)といふはトウドウ枯れしなり(兩言の例なり、前項参照すべし)。源氏推か本の卷に

「我なくて草の庵はあれぬとも、この一本は枯じとぞ思ふ

是も終にはかれぬともにいへるなり。歌にても文章にても此心にて見る時は其意味を盡して作者の肺肝を見るべし。土佐日記に曰

二十七日風ふき波あらければ舟いださず。これかしこくなげく男だちの心なぐさめに、からうたに日をのぞめば。都遠しなどいふなる事のさまをききて、ある女のよめる歌「日をだにもあまぐも近く見るものを、都へと思ふ道のはるけさ」。又ある人のよめる「吹く風のたえぬかざりしたちぬれば、波路はいとどはるけかりけり」。日一日風やます。つまはじきをして寝ぬ。

こゝに寝ぬといへる處、寝つとも寝きとも寝たりとも寝けりともいはど、いふべき所なるを。寝ぬといひたるは、都へはやく歸らむと思ふよりして。少しにても風やまば舟出さむと待つに。日一日風やまざりければ、力及ばずして寝しといふ意なり。ぬの一聲にて、風間を待ちし情の切なる所おも

ひ知らるるなり。又古今集羈旅の部に曰「隱岐の國に流されける時に、舟にのりて出たつとて。京なる人のもとにつかはしける

わたの原八十島かけて漕ぎ出ぬと、人にはつげよあまのつり舟

この和歌のことに就ては。文德實錄仁壽二年十二月篁朝臣薨まし、處に悉しく記されあり。其文に曰

五年春(承和五年也)聘唐使等四舶次第泛海。而大使參議從四位上藤原常嗣所駕第一舶水沃穿鐵。有詔以副使第二舶改爲大使第一舶。篁抗論曰。朝議不定再三其事、亦定舶次第之日擇取最者爲第一舶。分配之後再經漂廻。今一朝改易配當危器以已福利代他害損。論之人情、是爲逆施、既無面目何以率下。篁家貧親老身亦疴瘵是篁汲水採薪當致匹夫之孝耳。執論確乎不復駕船。近者太宰鴻臚館有唐人沈道古者、聞篁有才思數以詩賦唱之、每視其和常美艷藻。六年春正月遂以棹詔除次庶人配流隱岐國

在路賦謫行吟七言十韻。文章奇麗興味優遠、知文之輩莫不吟誦。凡當時文章天下無雙、草隸之工古二三之倫、後生習之者皆爲師模。七年夏四月有詔特徵。八年秋閏九月叙本位(中略)。篁長長六尺二寸、家素清貧、事母至孝、公俸所當皆施親友。

とあり。さて此歌に「こぎいでぬ」といへる詞を、こぎいでつともこぎいでしともこぎいできともいへばいはるゝ處にて。殊にこぎいづとといへば字あまりにもならず、なだらかなるを。こぎいでぬとと殊更にいはれたるは。かく遠き國に流されて今其國に行くとして。トウドウ船に乗りてこぎ出ぬといふ意ぬの一聲にて聞えたり。力及ばず歎よりこぎ出ぬといはれたるなり。げに篁朝臣は博識多才にして、しかも廉潔なれば。此當時にありては何事につきてもいきどほろしかりし事ぞ多かりけらし。其翌年夏には召かへされ。秋はや本位に叙せられしを見れば、思ひ知らるるわざぞかし

こし、さればかゝる折には平素のこととりあつめて、いきどほろしき事も思ひ出られ、歎もいやますものなるを。さるさまにはかけてもいはで。只今こぎいでぬといふ事ばかりを海出の釣舟にいひかけ給ひたる心中の鬱悒。思ひみるさへ涙こぼるるぞかし。さる無量の情只このぬの一聲にて思ひ知らるるなり。言靈の妙用たふとぶべし。あまの釣舟と云ひかけられたるは。一は神に訴へます節もありてなるべく。げに言靈の祐くる國、言靈の幸ふ國と。いにしへ人のいへるうべなりけり

外言の内結

外言のういしきく五聲に働く外に。みさの二音へわたるけじめ則ち内結あり

み

みと云ふ音へわたるは體なり。内なり

さ

さといふ音へわたるは用なり。外なし

みはのより續くと。たゞにつゞくとは自然になり。をより續くは此方の用となれど、猶其元を向ふへ置いていへるなり
 さはのより續くと。がより續くとあり

その例

み	内結	續きやう
	わさびのからみ	香をかぐはしみ
	のより續く	をより續く

<p>こと繁み。 わさびのからさ 香がかぐはしき</p>	<p>只に續く のより續く がより續く</p>
--------------------------------------	---------------------------------

たとへば、わさびのからみといへば、其からき事わさびの内にあるなり。わさびのからさといへば、其からき事外へ出たるなり。わさびを喰たる時いふ詞なり。香をかぐはしみといふは、此方の用となるなり。されど其本は向に置きていふなり。香もかぐはしさといふ時は其物を手に持つと云ふ我身のうへにあるなり。こと繁みなどは自然なり。尙下に記すを見るべし。

「吉野川ゆく瀬の早みしばらくも絶ることなくありこせぬかも
「霰降り鹿島の崎を浪高み過ぎてや行かむ戀しきものを

此二歌のより續くと。直に續くとなれば、皆自然なり

「足引の山をさかしみゆうつくる、榊の枝を杖にきりつる

「榊の香をかぐはしみとめ來れば、八十氏人を團居せりける

此二歌はをより續く故、此方の用となるなり。榊のかぐはしみは向ふにあるゆゑ、其根本をもとめて來て見ればと云ふなり。さは我身の上にあるなり。榊を手に持つて云ふ時はさなり

「酒の名を聖とおふせしいにしへの、大きひしりの言のよろしさ

「うるはしとおもふ我妹を夢に見て、起て、探るになきがさぶしさ

此二歌よろしと思ひ、さびしと思ふ情。今現在我身に、しかおぼゆる處にていふなり。此うるはしといへる歌の結句なきぞさぶしきといひてもよきを、いかゞと云ふに。きは取極めていふなり。さは現在身にしかと覺ゆるなり。故に獨言は必ずさと云ふ。人に向ひて云ふには必ずさと

いふべし

二重けじめ

「咲きたれば」「咲きたりければ」

八重けじめ

「櫻花さきたりければ」「花散らぬをば」

是等は、つなぎてにをはより入りて詞のけじめとなるなり。これ言葉は活々したるものゆる変化極りなきなり。されどすべて中柱にていへるが本にて、其他へ活用は末なり。依つて其活用は其本の意義を辨へて。解くべきものなれば。下々に示す中結、外結にて其本を知り。けじめの活用にかけて其意味を悟るべし。尙後に圖して本末を示したれば、参照して其深旨を知るべし

第五章 中 結

中 結 言葉のつなぎ

中結とは、今世にはつなぎといふものなり。其詞に數々あり。言葉のつなぎに

らむ らし けむ ける けり つる ぬる つゝ なむ 等、また

名のつなぎに

こそ すら だに ゆる さへ

等あり。以下次々に申すべし

中 結 言葉のつなぎ

らむ 自疑

らに返り翻へる靈あり。故にらむは、かへりくゝて、とらへられぬものを無

理におし定めて、かくあらむとおもふなり

「釧巻く手節の崎にけふもかも、大宮人の玉藻かるらむ

今頃は何をして居る事ぞとさまぐ思ふて玉藻刈て居るでアロウとおし定るなり。然れども何の證據もなければ猶さあらぬか知るべからざる意なり

「安胡の浦に船乗すらむをとめらが、玉もの裾に汐みつらむか

船乗りすともせぬとも裳の裾に汐満とも。汐満たぬとも知るべからぬを。此方より疑をおこし。かくあらむと向ふへおしつくるなり

「いざ子供はや日本べに大伴のみつの濱松まち戀ひぬらむ

松は待ち戀ふども、待戀はぬとも知るべからぬを。彼松は待ち戀ぬらむと此方より疑をおこしておしつけたるなり

「吾夫子はいづち行くらむ沖つものなばりの山をけふかこゆらむ

「ながらふる雪ふく風のさむき夜に、吾脊の君は獨か寝らむ

是等も前に出せると同じ意なり。おして知るべし

らし 他疑

他にある事をさまぐにおもひ見て、かくあるに大凡は違ひなしと量り知るなり。らの意はらしむのらにひとしむは押し定る義しは量り知る義なる故。らむのおし定る義よりはらしの量り知る方たしかなり。むとじの差別味ひ知るべく故に。らしは何いかに、かやなど云ふ疑詞の下につく事なし。らむは疑言の下につくが常にて。らむかなどさへいへり

「大夫の輶の音すなり(物部の)、大まへつきみ楯立つらしも

輶の音するをき、給ひて、大臣楯立らしと思ひ給へるなり、疑ふべきこと向ふにありて、それによりて疑をおこすなり。故に大かた證據を出して

らしと疑ひたり

「八田の野の淺茅色つく有乳山、峰の淡雪寒くふるらし

「三山には霰ふるらし外山なる、正木のかづら色付にけり

「鹽津山打越ゆけば我乗れる、馬ぞ爪づく家こふらしも

かく證據を出し又は眼に見たる所にて、かくあるに違なしとおもふは。

我鑑定を以て直に證據となせしなり

「名護の浦ゆそかひに見ゆるおきつ島、こきたむ舟は釣せすらしも

今眼前彼舟を見るに網うつにもあらず、藻刈にもあらず。必らず釣する

なりとおもひ知りたるなり

らしは俗言にニクラシキ人、カワイラシキ人と云ふにも同じ。此ニクラシ

キなどは一寸見たる人の顔付にて量り知る詞である。萬葉集に又らしき

ともよめり

けむ 去言の疑

過去りたる跡にて、以前の事かくありしならむと定るなり。神樂歌に

「榊葉にゆふそりしで、たか世にか、神の御室と祝ひそめけむ

「大汝少彦名のいましけむ志都の岩屋は、いく代經ぬらむ

「いにしへに有りけむ人も吾ごとか、妹に戀ひつゝいねがてにけむ

是等も同じ

「一本の撫子うゑしそのこゝろ、誰に見せむと思ひ初けむ

うゑて見せむと思ひし人は行き、思ふ所いたづらになりしと定めたるな

り

さてらむ、けむなどむの聲をむにはあらぬやうにおもふてんといへるは誤

りなり。其はこそを受る詞の例にてむなる事を明らむべし。左にその詞

を示す

ぞを受る詞	ゆく、 ゆかむ	ちる、 ちらむ	中柱
こそを受る詞	ゆけ、 ゆかめ	ちれ、 ちらめ	外柱

ける 去言中の今し言

其事今より先に成りたるをいふなり。けといふ音には消終る靈あり。故にしかありし上にていふ詞にて、俗に今心付タといふ所なり。されどもは中柱にて現在の音故、その事の今日の前にあるをいふなり

「妹とありし時はあれども別れては、衣手寒きものにぞありける
衣手の寒き上にて、今衣手の寒きものと心付たといふなり。るといへるは今も猶寒きをいへるなり

「君まつと庭にしをれば打なびき、我黒髪に霜ぞ置にける

「榊葉の香をかぐはしみとめ來れば、八十氏人ぞ團居せりける
八十氏人の團居せるを見つけたる上にて、さては榊葉の香ぐばしかりしは是なりと、今心付たといへるなり。るとあるは猶八十氏人が團居してあるを云ふなり

けり けるの去言に成りたるなり

その事成りて済たる後にいふ詞なり。けるに對へて心得べし、いさゝかの違ひなり。けりは其事成りて後ほどにもいふ詞なり。けるは今の先といふところなり。其の差はりと云ふ音は留柱にて去し言なり。そのうへつき終る靈ある故、その事しかありたる上にて云ふなり。伊勢物語披雲に(五十嵐篤好著)けりは思ひの卜なるをしめし、今はかくなりけりとぞ解するてにをはなりと出たり

「戀る日のけ長くあれば御園生の、からあゐの花の色に出にけり
今はかく色に出てシマウたるなりと解する意なり

「我背子に我戀をれば我宿の、草さへおもひうらかれにけり
今は草さへうらかれてシマウたりと解するなり

「秋の夜を長しといへど積りにし、戀を盡せば短かかりけり
夜が明けてシマウたる處にて、かく短かりしと解したるなり

源氏物語須磨の卷に「行平の中納言關吹こゆるといひけむうらなみよする
聲は、げにいとちかく聞えて、またなくあはれなるものは、かゝるところの秋
なりけり」。又同卷に、「月のいとはなやかにさし出たるに、こよひは十五夜
なりけり」とおぼし出でなごあり。これは源氏の君須磨の浦におはして。
都とはいたくかはりたる氣色を見て。旅なるものは、かゝる所の秋なりと、
今知り給ひしなり。又月のさし出たるを見給ひて。今夜は十五夜なりと、

今心付給ひしなり。さればけりとけるとは、今し言、去し言の違ひはあれ、大
かなかくの如し。今心付し、今かく思ひ知りしなどいふ所に當るなり

つる 今し言の結び

つるは其事の出来てより續きてあるを云ふ。例へば花咲つるといへば、花
の咲き出で、今も咲てあるを云ふ。又言つるといへば、いひ出で、今に其
いひし事の用の續てあるなり。つは強く續く靈あるゆゑ、忘れむとおもへ
ど忘れざる意に聞ゆ

「紅のこそめの衣色ふかく、そみにしかはか忘れかねつる
忘れむとすれども忘れられずして、今も思ふて居るさまなり

「馬並てみよしの河を見まく欲り、打越來てぞ瀧に遊びつる
山を越來べきばかりの事にもあらぬを。みよし野川の見まほしき止め

がたくて、かく山を越來て。萬事を打捨、瀧に遊び居るといふ意なり
「足引の山をさかしみゆうつくる、榊の枝を杖にきりつる
榊の枝は神前にそなふる木綿をこそ付くべきものなれ。杖にきるべき
物にはあらぬを。山のさかしければ、すべなくて大事の木をきり。かく
杖に切り今つくなり、と深くいふ意に聞えたり

ぬる 去し言の結

ぬるは、さはあらじと思ひし事の力及ばずして。遂にしかなるを歎く意なり。散ぬるといへば、散りたる所にて。豫て散らしまじと思へしに、かく散たると歎く意なり。けるけりに似たれども。ぬるは力及ばずして止終りたるにて。其事あとへ續かず、依つて大に味の違ふを知るべし
「愛しけやし、妾も子供も高々に、待らむ君や鳥かくれぬる

「もみぢばの散りなむ山にやどりぬる、君を待らむ人しかなしも
此二歌、鳥かくれといへるも、山にやどると云へるも、皆人の旅にて死したるをいへる歌なり。ぬといふ音は、いと弱き聲なること内結の所にいへるを見て、此歌をもよく、味ひ知るべし。只鳥にかくれ、只山にやどりといへるとは違ひて。力および終に鳥にかくれ、終に山にやどりしたるは、さはあらじと思ひしに、遂にしかなるを歎くなり。源氏物語推が本の卷、今治の八宮うせ給ひたりと、姫君のかたへ人來て申す所に「この夜半ばかりになむ、うせ給ひぬるとなく、申す」とある。此ぬるも力及ばず終にうせ給ひしをいへるなり。同卷薄雲の卷、左大臣うせ給ふ所に「大きおとどうせ給ひぬ。世のおもしとおはしつる人なれば云々」とありかくつかひわけたるに見るべし

上に出したるらむらしは現在の事なる故、中柱よりかゝり。けむけるけり

つるぬるは、いづれも過去なる故、留柱、外柱よりかゝれり。かく語格の明らかなる事に見て、よくく味ふべし

つゝ 續きつゞく

つといふ音には、強く續く靈あり。それを二つ重ねてつゝといへる故。つゞきつゞく意となるなり

「三島野に霞棚引しかすかに、きのふもけふも雪はふりつゝ」

「水そこの玉にまじれる磯貝の、かた戀のみに年は經につゝ」

「夜占とふ吾衣手におく露を、君に見せむとれば消つゝ」

雪はふりつゝといへるにて。きのふけふのみにもあらず、幾日も續きてふれる事知られたり。又年は經につゝといへるにて。一年二年ばかりの事にはあらず、幾年も經たりと聞ゆ。又とれば消つゝといへるにて。

一度二度にあらず、幾度もとれど消たりと聞ゆるなり

なむ 殘思

なむに。内言初柱より懸ると、留柱よりかゝると有り。内言初柱より懸るは未然に居て、しか成て吳よと思ふなり。又成るまじき事をも、しかなれと思ふ意にもいはるゝなり。例へば。ゆくは現在なるを、未然へ廻して、ゆくにてあるべしと押し定むる時は、ゆかむといふ。是は其人今は行くべき時節と思ふ故なり。此詞になの字を入れて、ゆかなむといふ時は。其人ゆくまじき時と思ふをしひて行きてくれとおしつけて見ゆるなり。故にさはなるまじき事をもいふ也。次に内言留柱よりかゝるは、未然に居て其事の成りたる上をおし定るなり。此なは去なり。過し事に成りてシマウをいふなり。ゆきなばと云ふに同じ。兩言は外柱のみよりかゝり、前段二つ

の意を兼たり。中結のぬに同じ類にて、調子の高低によりわかつなり

「我妹子は衣にあらなむ秋風の寒きこのごろ下に着ましを

(初柱よりかゝる)、あると云へば現在なり。それを初柱へ出してあらと

いふは未然なり。此未然に居てなむと心に押留め、おし定るにて。我妹

子は衣でありて吳と云ふ意に聞ゆ

「打なびく春ともしるゝ鶯はうゑ木の木間を鳴わたらなむ

「明日のよひ照らむ月夜は片よりに今夜によりて夜長からなむ

是等も初柱よりかゝるにて、前の意に同じ

吾が宿の花たちばなの何時しかも、珠に貫くべく其實成りなむ

これは留柱より懸る。なりなばといふなむの付たるなり。此な過去

になる事を未然に居て云ふなり。珠に貫くべき時が來るでアロウと

其事の成りたる上を押計り定めていふなり。此なこと下に出す圖に

あり

「我宿の萩の花さけり見に來ませ、今二日ばかりあらばちりなむ
是も留柱よりかゝる、前の意に同じ

「わだづみのおきつ白浪たつた山いつかこゑなむ妹があたり見む

兩言なり。立田山いつしか越て吳よといふなり。調子低し

「秋風の寒き朝けをさぬの岡、こゑなむ君にきぬかさましを

これも兩言なり、さぬの岡をこゑてシマウたる君とおし定るなり。調子

高し

中結 名のつなぎ

こそ 評論

こそのつなぎは、裏あることをいふ。例せば春こそおもしろけれといへば、

秋はおもしろからずといふ裏あり。これこそよけれといへば、それはわろしといふうらあるなり(これは、これ、それといふ事なるゆゑ、もの二つを評するなり)

「戀死なむ後は何せむ吾いのち、いける日にこそ見まく欲りすれ

「昔こそ難波のなかといはれけめ、今は京と備りにけり

「吾こそはにくもあらめ我宿の花桶を見にはこじとや

吾こそはにくもあらめは表なり、花桶を見にはこじとやは裏なり

「白菅の眞野の榛原ゆくさくさ、君こそ見らめ眞野の榛原

「天地の神も理りなくばこそ、吾念ふ君にあはず死にせめ

此歌の如き一首の内に裏なきは言外にあるなり。天地の神理りあれば

吾念君にあはずには死にはせじといふ裏あるなり

かく裏あること古歌はもとより、今も俗言には少しも誤る事なく常に多く

云ひなれたるを近き世の歌には、誤りが多く見えたり

すら 類集

類を集るなり。鳥すら反哺の孝ありといへば、人はまして孝あるべき事なりといふ類を集るなり

「ことゝはぬ木すら春咲さ秋すげば、もみち散らくは常をなみこそ

言外にまして人は常なしといふ類を集めたり

「高鳥やゆるきの森の鷲すらも、獨は寝じとあらそふものを(六帖)

言外に、人なる我は、まして獨は寝がたしといふ類を集たり

だに

只一つにかゝるをいふ。酒だにあればよしといふは、肴はなくもよしとい

ふ意にて。まづ酒一つ當用なるなり

「事繁げみ君は來まさず時鳥、汝たれだに來鳴け朝戸開かむ

「妹があたり今ぞ吾ゆく目にだにも、吾に見ゑこそこととはすとも

目に見るといふが當用にて、目に見たるならば外事はいらぬとなり

「夢にだに見ざりしものをおほしく宮出もするかさひのくまはを

夢にだに見し處ならばこそあらめ。其夢にだに見ざりし處なるものを

といふなり

「風をだに戀ふるはともし風をだに來むとしまたば何か歎かむ

是は風が當用なり、だには猶遣ひさま多し、是等にて押て考ふべし。近世

ナリトモといふ俗言を以て解に付たれども全くかなはざるなり。ナリ

トモといふは。次なるものに付て、主なるものに付かず。だには次なる

物にても主なるものにて、只當用一つにかゝるなり。たとへば人を招

くに。名代だに、下人だに來らずと云ふは俗言のナリトモにて聞ゆれども。自身だに、主人だにと云ふ時はナリトモにては聞えざるなり。竹取物語燕の子つば安貝あひの處に「人だに見ればうせぬと申す」といへり。是等主なるものをいへるなり

ゆゑ 順對

ゆゑは。ものゝおこりをいふ。順にゆくなり。夏ゆゑ暑い、冬ゆゑ寒いと順にゆくなり

「朝かげに我身はなりぬ玉垣の、すきまに見ゑていにし子ゆゑにいにし子が起りにて。それより朝かげに我身はなりしなり

「ゆけどく、あはぬ妹ゆゑ久方の、雨露霜にぬれにけるかな

「花くはし蘆垣こしに只一目相見し子ゆゑ千重に歎きつ

是等あはぬ妹一目見し子が起りにて露霜にぬれ千重に敷きたるなり

さへ 反對

さはあるまじき事のあるをいふ。夏さへ寒い、冬さへ暑いなど。さは廣かりさわぐ。ゑはものゝ内へ集る靈あれば。反對にして、あるまじき事なればなり

「雪こそは春日消らめ心さへ消うせたれや言も通はぬ

春の日雪の消ゆるは順常なり、心の消はあるまじきこと

「六月の地さへさけて照日にも、我袖ひめや君にあはずして

「我袖のひ水底さへもてるまでに、三笠の山は咲にけるかも

我袖のひ水底のてるはあるまじき事なり。萬葉集に副と書たるゆるゑ、そ

へる義といへる説あれど。そへは次なるものにいひて、主たるものにい

はず。例へば衣を進せる、帯もそへてといふべし。帯に衣をそへてとは

いふべからず。さへは主にせよ次にせよ只あるまじき事のあるをいふ

君によりては命さへ惜しとおもはぬといふは。金錢はおろか、それより

大切なる命にてもどいへるにて。中々そへて送るころにてはなし。

古今集遠鏡頭書にいへるは此さへの味を委しくされざるものなり。

「橘は子さへ花さへ木の葉さへ、枝に霜おけどいやとこの木

以てゆるゑの反對なるを知るべし。

尙此外に。けるかな。つるかな。ぬるかな等。ける、ぬる、つるにかなの外

結びの添はりたる例多し。右はかなと云ふてにをは(外結)によりて、一段と

詞が強くなる趣ありて。けるかなに存外の心あり。つるかなに強く、君ゆ

ゑにとか云ふ趣きあり。ぬるかなには。弱く弱つたとか云ふ如き趣きあ

りて。尙後の外結の解を推して辨ふべし。次に

らく。あへらく。あそばく。みなく。等のつなぎ詞あり。此類いと多し聞かく。雨のふらく。きかなく。云はなく。暮さなく云ふ類これなり。例へば

「大口おほくちのまかみが原に降る雪は、いたくな降りぞ家もあらなくに

「矢釣山木立も見えず降り亂る、雪に騒ぎて朝参あさまらく吉よしも

「吾が夫子せこは物な思ひぞ事しあらば、火にも水にも吾れ無なけなくに

「櫻花散らば散らなむ散らすとも、ふるさと人はきても見なくに

「磯かけのもゆる池水照るまでに、さけるあしべの散らまくをしも

是等みな中柱に云ふ事を初柱へかけて言へるなり。あらぬをあらなく。

朝参るを朝参らく。無なくをなけなく。見ぬを見なく。散るを散らまくと

未然へかけて云ふにて。遊あそぶを遊あそばく。見るをみらくと云ふ類みな同じ

これ雪のふると云ふは今降ることなるに。ふらくと初柱へかけて云ふは未然に云ふなり。餘は推して知るべし。

近來、古學者に是れをのべことばと云ふ。いはれあれども我皇國にはちゞめ言葉はあれども、のべ言葉はなきなり。家もあらなくにと云ふは。たへてなきとにはあらず。先々にはあるか知らねども、今此にはなしと未然をさして云ふなり。來ても見なくには。今は來ずとも翌日あしたは來るか知ぬゆるにかくは云ふなり。此外

蓋けだし 殆ほとほと 則すなはち 尙なほ 豈あに 最たつとも 借かして 將した

此類みなつなぎなり。言靈を以て考へ知るべし。

枕辭まくらことば

枕辭、これ亦つなぎの一種なり。上古さとし言葉と云ふ。意味を失はずし

てさどす言葉なり。

「朝もよし紀伊へ行く君がまつち山越ゆらむ今日ぞあめなふりそね
紀伊の國へ行くと云ふこと、まかねしくなど紀伊の國に云へり

「なるかみの音のみ聞きしまきむくの檜ばらの山を今日見つるかも

なるかみの五文字は枕辭なり。まきむくのつはらとかにはの檜ばらく
とか云ふは、檜ばらのさとしなり。

「行川のすぎにし人の手折らねば、心詫れ立てり三輪の檜ばらは

行川の五文字は枕辭なり、うらふれたてりとは、しきりたる言なり。

是等の類上の五文字なくとも聞ゆれども、唯すぎにし人とはかりにては行
き過ぐる人か、又過ぎしする人かまぎらるる故に。しゝ過たる人にあらず
行き過ぐる人と云ふことをさとしたるなり。又音に聞くとばかりにては
音は大小まぎらるるゆるなるかみの音とさとしたるなり。

すべて枕辭は、ものを強く云ふ爲なり。たとへば過にし人を強く云はむ爲
めに「行川の」と冠らせたり。又物のまぎらるる所に置くなり。この人をまつ
ほの浦のとある、この人をの上五文字さりて見れば松のことになるを。此
人をまつと云へば、人を待つのみまつになるなり。されば「露霜の小倉の山下
家居して」とある如き露霜の枕辭の如きは却つてまぎらるるなり。露霜を置
くと云ふ言葉はなし、辨ふべきなり。又枕辭にて歌のさまよく調ふること
もあるなり。例へば「いしのひの短かき」「菅の根の長き」。この短かき長き
の如きは、即ち下の句のまぎれぬように。いしのひの短かきとか、菅の根の
ながきとか置くなり。石の火は如何にも短かきものなり。菅の根は如何
にも長きものなり。かく因みを失はずして、さどし言葉を置くことなり。

薄氷

薄らへぬ、薄き心

まきばしら

太き心

てといふ音には出はたらく靈あり。日光の天より此處まで出ではたくを
 てるといふ。人の手も出はたらくもの器の手も同じ働きのことばあり。
 うけててといひたるには必ず働きあり。行て花を見る、歸りて文をかくな
 ど。

「日並斯の皇子命の馬なべて、御狩たし、時は來むかふ

「神風の伊勢の濱萩をりふせて、旅寝やすらむ荒き濱邊に

かくてのうへした働の詞なり。笠女郎贈大伴宿彌家持歌三首のうち譬
 喩歌

「つゝま野におふる紫衣にすり、いまだ服ずして色に出來

落句色に出にけりと自然に訓みたるは誤りなるべし。色にいだしけり
 と働きに訓むべし。此歌は未だ逢ざるに戀のあらはれたるをたとへた
 る歌にて。夫は忍ぶとすれど自然に顯れたるを歎きたるにて。我心か

ら顯はしたるにあらねば色に出にけりとは云ふべく、いだしけりとは云
 まじき理におもはるれど。詞の遣ひさまと云ふものはたへなるものに
 て。情の切なる時は、理に違へることも自からいわるゝを。聞人も聞誤
 まらずして、情の切なるを思ひ知るものなり。俗語にも、愛子などの死た
 る時、我も大事の子を殺しましてなど云ふ。是我殺したるにはあらず、病
 して死たるなれども、情の切なるよりして殺したりといへるにて、聞く人
 もいとく哀に感ずるなり。萬葉五に。戀男子名古日歌三首此歌作者
 不知とも山上恒良なるべしとも左註にいへり、さもあるべし、愛子の死た
 るをかなしめぬ歌なり、の内、長歌の終に、手に持てる吾子飛ばしつ世間の
 道といへるも云々とあり。同じいひざまなり。飛ばしつといへるにて
 見ば、長病にはあらず、しばしの煩にて死したるを悲しめりと聞ゆるなり
 色に出しけりも是と同じいひざまにて。戀の顯れたるを歎く情の切

なるよりして、我から顯したる様に云るが甚々哀なるなり
上自然なる時は下自然なるもあり

「芦邊ゆく鴨の羽かひに霜ふりて、寒き夕べは大和し所念おもほせ

「見渡せは柳櫻をこきませて都ぞ春のにしきなりけり(古今集)

此歌落句自然の詞を用ひたるはいかゞなり。錦なしけりといはではての働なくてかなはざるなり。てのうへを自然にして柳櫻うちまじりてといはゞ落句錦なりけりにても難なかるべし。是は歌のしらべにかゝはらず只ての働をさとさむため理りをいへるなり。千蔭ぬしのうたとて人の語りける聞誤りにもやあらむ

「燈ともしびをかゝげ盡して窓の外にほのめく秋の有明の月

此歌ての上下ともに働の詞なれども、彼我の違ありて不調なり。燈をかゝげ盡すは我なり。窓の外にほのめくは月なり。されどての働によりてきは聞えずして。月が燈をかゝげ盡して窓の外にほのめくと聞ゆるなり。ての上下、彼我の違ひありては聞えぬなり。此誤り近來の歌にいと多し。ては如此働きのある聲ゆえてと留りたる歌は必ず上へかへりて聞くべきなり

「大君はときはにまさむ橘の殿の橘ひたてりにして

「櫛も見じ屋中もはかじ草まくら、旅行く君を祝ふと思ひて
かく初句へかへるを大返おほかへしといふ

「璞の年のを長くいつまでか、我戀をらむ命しらすて

「藤原のふりにし郷の秋萩は、開て散にき君まぢかねて
かく四句等へかへるを小かへしといふ。大かへしは年のめぐるがごとし。小かへしは月のめぐるが如し

又上にかへる所なきは言外にあり

「伊勢のあまの朝魚夕菜にがつちふ、鯨の貝のかたもひにして、いどもくるしきといふ事を言外におもはせたり。言外に思はする事は、のみに限りたる事にあらねど、は働き強き聲ゆへて、の下殊に多くの詞を省きていへること多し。俗言にても蠶飼して衣にするなどいふは蠶飼して糸をとりて、機におりて、衣にする事なるを。中の間を省きていへるなり。求めて省かむとて省きていへるにはあらねど。自然に省かれていはるゝは聲の靈妙なるどころなり。これての音に出働く靈あるゆへなり。

「亦打山夕越ゆきて、庵さきのすみだ川原に獨りかもねむ

まちつ山を越行て獨り寝るまでには。庵を作り、糧喰ひなど、さまざまの事あるを。何もいはざれど其意こもりて聞ゆるなり
 「君が代も我世も所知哉、岩代の岡の草根をいざ結びてな

「時の風ふくべくなりのぬかしひがた、汐千のきはに玉藻かりてな

前の歌は結びて寝むな。次の歌はかりて來むなど云ふ意なり。寝む來むといふことての下に省りたるなり

「山かひにさける櫻を只一目、君に見せて、は何をかおもはむ

「足曳の山櫻花ひとめだに、君としてみてはあれ戀めやも

此二歌ともての下にをかしと思はばなど云ふ詞省けり。又はの下にその上になど云ふ詞省りたるなり。はの下にも詞省かるゝ事はのところにいふべし。望月ぬしはこのてはを不足と心得たるがよしと云はれた

「大伴のみつの濱なる忘貝家なる妹を忘れて、念や

「夏野行を鹿の角の束の間も、妹が心を忘れて、念や

「妹が袖別れて久になりぬれど、ひと日も妹を忘てもへや

「たるひめの浦をこぐ舟かちまにも、ならのわきへを忘れて、おもへやかく忘而念哉とよめる歌、萬葉集にいと多し。いづれもての下にあだし事をといふ詞省りたるにて。おもへやはおもはめやの約りたるなるべし。初の歌は、妹を忘れて他し事を思はめやといへるならむ。夏野行、たるひめの二歌のごときは。思はめやの約とせずして、おもへやと我と我心にいひおふする詞として。さるは妹が心の餘りに忘れずして、くしければ、しばしは忘れて他し事をおもへやといへる意としても聞ゆめれど。十が七八までもおもはめやの約と見たるがよく聞ゆめれば、おしこめてかく見たるも難なかるべくなむ。かく約めて云る歌は「わきも子や吾をわすらすないそのかみ、袖ふる川のたるむと思へやおもはめやの約なるべし」
「うつたへに籬のすがた見まく欲り、ゆかむともへや君を見にこそ

「霞立つ春日の里の梅の花、花に問はむと吾が思はなくに

いはめやの約なるべし、

「なぐさむる心しなくば天離る、鄙に一日もあるべくあれや

あらめやの約なるべし、是等にて知るべし

此外に。てむ、てめ、てまし、てけり、てもがもなど猶多くいへるも。

皆ての下に自ら省りたる詞ありと見るべし。ての音は出はたらく靈あるゆゑ、かゝる言外のはたらきあるなり。これての聲にかゝる靈ある事を知りて後かいつかひたるにてはない。自づからかく言はれ来て、人も不審みもあらずして聞取ぬるにて。これ天地の自然なる靈あればなり。されば俗言は目前の用を辨ふる事ゆゑ、自からの働らきにて誤る事なきを。なか／＼に歌などによめるが、誤れるもあるは。今世の歌は本情より出たるは少なく。先づは設け出で、案じ出せる歌なればぞかし。たゞ天地の眞直

なる法則を守るべき事にこそ

に●順したかふの辨 身につく儀

に●といふ音には、そとにつく靈あり。に●べ、やに、べになどよくつくもの
荷かは馬にか、人にかつくなり

さればにははじめにいへる詞にしたがひつくなり。馬に乗る、舟に積むな
どいふ。によりは飛ぶことならぬ音なり

「春の野にあさるきぎしの妻戀に、おのがあたりを人にしれつゝ、(古今集)

「夜占とふ吾衣手におく露を、君に見せむとされば消つゝ、

かくにといふは、それに付くる事ありていへる音ゆる。歌の落句、いと

留めたるは上にかへる所あるなり。又かへる所なきは言外にあるなり

「妹が見し宿に花さく時は經ぬ、吾なく涙いまだひなくに」

「風吹かぬ浦に波たつなき名をも、吾はおふかもあふとはなしに
是等は小かへしなり。又言外なるもあり。」

石田王卒し給ひし時。丹生王の悲みてよみ給ひし長歌の反歌

「石上いそのかみ振の山なる杉村の、思ひ過ぐべき君に有なくに」

おもほえず失せましゝことよといふ意、言外に聞えたり。これ情の切な
るよりしていひさしたるが、いとく哀なるなり。又大伴家持卿亡妻を
悲みて「今よりは秋風寒く吹なむを、いかでか獨長き夜をねむ」といへ
るを弟書持卿の和歌

「長き夜を獨りやねむと君がいへば、過にし人のおもほゆらくに」

再びいひ出し給ふなど、かなしさにたへずしていさめたる情、言外に見ゆ
るを、いひもあへざるがいとく悲しきなり

にといふは、必ず付くべき事ありていへる音ゆる、にといひさしたるは、必ず